

成人

第六五号

\*PDFの公開は、優秀卒業論文の紹介を中心にした誌面の抜粋に限定しました。目次に掲載された全文をご覧になりたい方は、宗教学科研究室にお問い合わせください。

## 目次

### 研究室より

宗教学科主任 挨拶

雑感 (澤井 義則 教授)

・  
・  
・  
・  
二頁

・  
・  
・  
・  
一頁

### 【平成二九年度 卒業論文 優秀作】

北欧神話における終末論―女神ヘルはなぜ追放されたのか―

佐藤 明来  
・  
・  
・  
三頁

おつとめにおけるおうたと手振りの関係性

吉田 あゆみ  
・  
・  
・  
三四頁

### 成人会より

今年度の活動をふり返って 六五代委員長 五百部 護

・  
・  
・  
・  
五七頁

平成二九年度 成人会役員名簿

・  
・  
・  
・  
五八頁

平成二九年度 成人会活動報告

・  
・  
・  
・  
五九頁

### 会員の声

・  
・  
・  
・  
六〇頁

## 【研究室より】

宗教学科主任 岡田 正彦

宗教学科の新生オリエンテーションでは、かつて佐藤浩司教授が、毎年新生に四年間で大学を卒業するための「秘訣」をご教示してくれました。一つ目は、「朝起きること」、二つ目は、「学校へ行くこと」、そして「ノートを取ること」の三つです。

佐藤先生が定年のために退任されてからは、私が学科主任の立場でこの秘訣を新生に伝授してきました。

\*

今年度の卒業生は、その一年目に入学した方々です。四年間を振り返って、このアドバイスを生かすことは出来ていたでしょうか。朝起きて学校へ行くことは、学生にとつて「当たり前」の行為です。また、講義に出席してノートを取る——つまり、真面目に授業を聴く——ことは、もともと当然のことでしょう。でも、この当たり前前の行為が、当たり前前にはできなくなることがある。

それが人生です。

どんなに強い意志を持っていても、体調を崩せば普通の生活を続けることはできません。ときには、経済的な理由で学業を続けることが困難になる人もいます。深夜のアル

バイトで寝不足が続いていれば、講義に出席してもなかなか授業に集中するのは難しい。

誰にでもできる行ないを続けることが、本当は一番難しいことなのです。なぜなら、当たり前前ということが当たり前前にできることは、決して「当たり前前」ではないからです。

今日も昨日と同じように目が覚めて、床から起き上がることができるのは、「かしの」の身体が昨日と同じように使えるからです。台風や大雪の日には、講義が中止されることがあります。なかには、喜んだ学生もいたかも知れませんが、逆に言えば、災害や戦争などの大きな問題があれば、今日も昨日と同じように、授業を受けることはできないということなのです。

当たり前前ということが当たり前前にできるだけではなく、今日も昨日と同じように暮らせる毎日に、いつも感謝できる人になつてもらいたい。そう願つて、大学生活の「秘訣」を伝授してきたのですが、皆さんの四年間は、いかがだったでしょうか。

\*

今号の成人には、今年度の卒業論文の中から優秀作を二本掲載しました。もちろん、ここには掲載されていませんが、ほかに優れた卒業論文がいくつも提出されました。素晴らしい成果を残した、皆さんのさらなる飛躍を心より祈念しています。

## 雑感

### 澤井義則

古来、「光陰矢の如し」「歲月人を待たず」といいます。いずれも月日の経つ早さを譬えたことわざです。時間は人の都合などお構いなしに過ぎゆくものであり、人を待つてはくれないということです。

このいずれのことわざにも、人生を生きていくうえで戒めの意味合いが込められています。つまり、人はあつという間に年老いてしまうので、後に悔いを残さないためにも、今という二度と戻らない時間に真剣に向き合って生きることが大切である、ということでしょう。

\*

先月の本部の春季大祭当日の夜、私が宗教学科に着任した当時、三回生の学生だった卒業生三人と夕食を共にしました。彼らと酒を酌み交わすのは卒業後はじめてのことでしたが、すぐに懐旧談に花が咲きました。

彼らの同級生の二人がすでに出直したことや、その他の仲間たちの近況などを聞かせてくれました。また、「学生時

代にもっと勉強しておけば良かった」としみじみと語りながら、「来年はもう還暦を迎えるんですよ」と、月日の経つ早さに半ば驚いていました。

\*

一方、私も本年三月末で奉職三十八年になります。その間、私なりに精一杯勤めてきたつもりですが、いたずらに馬齢を重ねているだけではないかと思ひ悩んだこともありました。そうした時期を乗り越えて、今日まで仕事を続けることができたのは、その時々素晴らしい学生さんたちとの（人生の出会い）をとおして、教員であることの喜びと醍醐味を味わうことができたからです。

この三十八年間に振り返ると、まさに、あつという間でした。もちろん、後悔が全くないと言えば嘘になります。むしろ後悔と反省の連続だったように思いますが、今となつては、すべては懐かしい思い出となりつつあります。

人生の一区切りを機に、改めて「光陰矢の如し」「歲月人を待たず」を心に刻んで歩み出したいと思ひます。学生諸君も、二度と戻らない今という時間を大切に、有意義で充実した学生時代を過ごしてほしいものです。

平成二九年度 卒業論文 優秀作

## 北欧神話における終末論―女神ヘルはなぜ追放されたのか―

佐藤 明来

コメント

宗教学科講師 渡辺優

佐藤明来君の卒業論文は、よく知られた北欧神話の終末論「ラグナロク」を主題としつつ、北欧神話において重要な役割を与えられながらもラグナロクにはほとんど関与しないとみえる女神ヘルの位置づけについて、新しい解釈を与えようとした野心的な試みである。

序で言われているように、まさしく「遙か古代から現代に至るまで、人類の文明はほかならず神話と共にあった」。近代は脱神話化の時代とも言われるが、古代の神話は現代のゲームや小説にもしばしば重要なモチーフを提供している。佐藤君自身、そうした作品に親しむなか神話というものに関心を抱くようになつたという。しかし、出発点となる問題関心のシンプルスとは対照的に、本論文の議論の運びは努めて「学術的」に展

開されている。

北欧神話における女神ヘルの役割の解明という論点は、非常に的が絞られており、議論の専門性も高い。しかし本論文は、北欧神話とラグナロクをめぐって、まず神話学的類型論（とくに松村一男に多く依拠している）を概観する。そもそも「神話とは何か」を問う手続きを踏むことで、専門性が高いゆえ、ややもすると問いの意義が見えにくくなる可能性もある議論に、確かな枠組みが与えられている。「終末神話」の神話学的類型を確認し、さらに他の終末神話と比較することで「ラグナロク」の特徴を際立たせるといふ議論の展開は、論文全体の組み立てとして非常に有効であった。

著者の主張は第三章に凝縮されている。著者は、原典である神話の言葉を丹念に読解しながら、先行研究や、神話をモチーフにした小説をも参照して、矛盾多く謎めいた女神ヘルの位置づけに独自の解釈を与えてゆく。かくして導き出される結論は「女神ヘルは、かつて主神であったテュール、その妻の側面なのではないだろうか」というものである。この結論は、しかし、著者自身も認めているとおり、多分に推測に基づくものであり、仮説の域を出ない。筆に力と勢いがある余り、断定的な口調が論理の飛躍を隠してしまう箇所も散見される。ヘルの「女性性」や、他の神話や宗教伝統との相互作用による神話のハイブリッドな「変容」など、さらに深めてほしかった論点も少なくない。

だがそれでも、筆者の主張は読む者に「そうかもしれない」と思わせる説得力をもっている。本論文の最大の魅力は、慎重かつ大胆な論述にある。私自身、一種の推理小説を読んでいるような感覚にとらわれた。これぞ卒論の醍醐味なのだが、そのような感覚を与えてくれる卒論は少ない。佐藤君の努力に心から敬意を表する。

## 序

科学技術の発達により、現代を生きる人たちにとって宗教的事柄、特に神話のようなものは、馴染みの薄いものだと考える人も多いだろう。しかし、今日においていうならば、神話に関わる機会はむしろ増えていると私は考える。たとえば、最近では様々な小説やアニメ、ゲームといったメディアで神話が用いられている。もしも、現代の子供たちに神話について聞いたならば、日本神話の怪物ヤマタノオロチやギリシア神話の天空神ゼウス、聖書の随天使ルシファーなど、多くの名前が答えに挙がってくることだろう。私自身、様々な神話に興味を持つようになったのも、そういったメディア、特にゲームやライトノベルで目にしたことがきっかけである。本

論文が取り上げる北欧神話は、数ある神話の中でも特に好んで題材にされたり、世界観や単語を引用されたりするものの一つであり、最も私の関心を引いた神話でもある。

北欧神話はゲルマン神話と呼ばれることもある。しかし、北欧神話はいくまでゲルマン神話の一形態に過ぎない。ただし、他のゲルマン神話はほとんど資料が残っていないため、事実上ゲルマン神話＝北欧神話と認識されることも多い。また、北欧と言ってはいるが、実際のところは主にアイスランドに残った資料をもって北欧神話としている。理由としては、北欧文学者である山室静の言を借りると「アイスランドのキリスト教採択が大分に政治的なもので、古い首領たちが依然として権力を握り、昔からの異教的精神を保存した」ことが挙げられる。つまり、他の北欧諸国における神話群は、キリスト教化の後に異教信仰としてキリスト教の聖職者たちによって排除されたが、アイスランドではそのようなことが行われなかったということだ。(1)ただし、神々への信仰が薄らいでいったことは避けられなかったと考えられる。なぜならば、北欧諸国や英国では、北欧神話の主神であるオーディン(2)が、悪魔や悪霊として扱われる話(3)が残されてい

るからである。

遙か古代から現代に至るまで、人類の文明はほぼかならず神話と共にあった。神話学はそれぞれの神話を比較することにより、共通点や独自性を浮かび上がらせる。その上で、特に重要なテーマとして挙げられるものがいくつか存在する。例えば、「世界はどのようにして作られたのか(創世神話)」、「人間はどのようにして作られたのか(人類誕生神話)」といったものである。また、北欧神話をみていくならば、「世界はどのように終わるのか(終末神話) (4)」も重要なテーマとして挙げる必要があるだろう。

本論文では、北欧神話の終末神話である「ラグナロク」に焦点を置く。その上で、ヘルという女神に光を当てていきたい。詳細は第三章に譲るが、この女神は災厄をもたらすとして神々より追放を受けるが、最後の時であるラグナロクにほとんど関与しない。同様に追放された二人の兄弟は、北欧神話における主要な二神であるオーディンとトールを殺害するという活躍を語られているにもかかわらず、災厄をもたらすと語られながらも、ラグナロクにおいて目立った働きを語られないヘルという女神は、北欧神話においてどの

ような役割にあるのか。北欧神話やラグナロクがどのようなものか、というところまで立ち戻って考えていきたい。

第一章では、北欧神話の原典について簡単に紹介しながら、「創造神話」、「人間創造」、「終末」の三つのテーマについて、神話学の類型という視点から見直していく。

第二章では、「ラグナロク」という終末神話を紹介していく。その過程として、他の神話と比較することで、「ラグナロク」の持つ独自性を浮かび上がらせたい。

第三章では、女神ヘルを主要な登場人物とする物語から、本論文の問いと疑問を提示する。その上で、結論へ繋がっていく考察を行っていく。

## 第一章 神話学から見た北欧神話

神話について論じるためには、まず「神話」という言葉を定義しなければならない。しかし、松村一男が『神話』の定義は研究者によって千差万別である(5)というように、これ自体が一つの問題になっている。ある研究者の定義では神話に分類される物語が、別の研究者の定義では含まれない、

ということが往々にしてありうるのだ。そこで、ひとまず本論文では、神話という定義をできる限り広く取るため、私自身の定義として「神々やそれに類する存在、またはこれらが存在する世界を題材に用いた話」としておきたい。

この定義を踏まえ、神話学の中で重要なテーマとされる「創世神話」「人類誕生神話」「終末神話」を一節ずつ論じていくとともに、北欧神話はそのテーマの中で分類するならばどのタイプに属するのかをみていきたい。

## 第一節 天地創造

ほとんどの神話には世界創造の物語が存在する。『古事記』においては伊邪那岐・伊邪那美が泥海を天沼矛でかき回した話が伝えられているし、『旧約聖書』では神が「光あれ」と言ったことから天地が分かれたとされている。これらについて松村一男は次のように述べている。

大きなものから小さなものへという順序、そして混沌（無秩序）から秩序だった状態という順序、この二つは世界のはじまりの神話に共通してみられる特色である（中略）こうし

た決まった配置がいたるところで認められるのは、それこそが世界のはじまりの神話の存在理由だからにほかならない。（中略）人間が自分たちの存在について不安感や好奇心をいだいて思索をはじめたこと、それ自体がはじまりについての物語である神話を生み出すことへの第一歩だったのだ。考えることは頭の中を整理整頓しようとすることだし、それはすなわちはじまりの物語としての神話を語る事だった。（6）

つまり、神話が語られ始めた理由は、「現在」存在しているものは「過去」何をルーツに始まったのか、という疑問を人間が持つに至ったことだというのだ。だとするならば、この節で論じる「創世神話」や、次節で論じる「人類誕生神話」が、神話学において特に重要視されていることや、社会における文化や常識の発端を物語る「起源神話」(5) というものが存在することにも納得がいく。

では、北欧神話では天地創造をどう語っているのか。それを知るために、北欧神話において「古エツダ」と呼ばれるものに収められている「ヴァフズルーズニルの歌」から該当節を引用したい。

オーデン

「ヴァフズルーズニルよ、もしあなたの知恵が役に立ち、知っているなら、まず答えてください。大地と天は最初どこからきたのか、物識り巨人どの」

ヴァフズルーズニル

「ユミルの肉から大地が、骨から岩が、霜のように冷たいその巨人の頭蓋骨から天が、血から海が作られたのだ」(8)

これは、神話学において世界巨人型、もしくは死体化生型と呼ばれるタイプであり、中国(9)やバビロニアなど、世界各地で多く見ることができる。世界巨人型とは、最初に一人の巨人、あるいは巨大な生物が存在したとされ、(10)後に生まれた神々はこれを倒す。そして、倒されたものの死体を素材として天地をはじめさまざまなものを作る、というものである。もちろん、それぞれの神話は成立した文化や自然環境、その他様々な事柄が異なっているため、各神話も自然とそれぞれの特色を帯びている。

また、引用した創造神話が、最もよく知られている北欧神

話の天地創造である。神話の研究者たちも、北欧神話の創世神話を取り上げる場合には「ヴァフズルーズニルの歌」、もしくは、アイスランドの政治家であり詩人でもあったスノーリ・ストウルルソンが「古エツダ」やその他のエツダ詩を参考に書いた、一般に「スノリのエツダ」(11)と呼ばれる書物の中に収められている「ギユルヴィたぶらかし」を用いている。しかし、「ヴァフズルーズニルの歌」と同じく「古エツダ」に収められている「巫女の予言」という詩ではまったく違う話が語られている。(12)こちらでは、「ヴァフズルーズニルの歌」や「ギユルヴィたぶらかし」と違い、世界巨人型の描写は全く見られない。それどころか、天地創造の話に重点が置かれていないのか、詳細な描写すらない。アイスランド詩の権威であるシーグルズル・ノルダルの言葉を借りるならば、「巫女の予言」のなかでは「いかにしてブルの息子たちが、海が、また海のなかの大地ができたか触れていない」(13)のだ。

先の松村の引用から、あらゆる事物のルーツを探ることが、神話において重要だとするならば、必然、神話学研究において着目される。ゆえに、ノルダルのいう「いかにして」、つま

り、なぜ、どのようにしてこの世界が創られたのか、という部分がないものは取り扱いにくい。そのため、これまでの研究には、天地創造が詳細に書かれている「ヴァフズブルーズニルの歌」や「ギユルヴィたぶらかし」が用いられ、「巫女の予言」にはあまり触れられなかったのだと考えられる。

## 第二節 人間創造

神話が生まれた根底に、先に引用した松村がいうような理由、すなわち、あらゆる事物のルーツを探るという目的があるならば、世界のルーツを明らかにしたのみで人間の思索が止まらないことは想像に難くない。やはり、自分たち人間がどのように作られたのか、についても思索されるであろう。『旧約聖書』における、神が土を自分の姿を真似て固め、息を吹き込んだという人間創造は有名だが、実際に他の神話でも人間創造が語られていることが多い。では、北欧神話では人間創造がどのように語られているのか、今度は「巫女の予言」より引用したい。

そしてその群れから／三人が、力づよく

愛情あふるるアースたちが／家にやってきた。  
かれらは陸で見出した、／力とほしき  
アスクとエンブラを、／運命なき者たちを。

ふたりは息がなかった。／ふたりは心がなかった。  
血も声もなかった／そしてまた美しき姿かたちも。  
息はオージンが授けた、／心はヘーニルが授けた、  
血はローズルが授けた／そしてまた美しき姿かたちも。(14)

「アスクとエンブラ」(15) はいずれも植物をあらわしている。神々(16)は流木として流れ着いた(17)これらの素材に、息や心といった要素を授けることで人間を創造したのである。この物語から明らかのように、北欧神話は木を用いて人間創造を行っている。しかし、私の知る限りにおいてこのタイプは他にほとんどない。松村の『この世界のはじまりの物語』においても、木を用いた創造はこれのみで終わっている。逆に、多いものは土を用いたタイプで、松村も「もつとも目立つのは、人間は土から作られたとするタイプである」と述べている(18)。こちらは、先に述べた『旧約聖書』の

他にも、ギリシア神話での女性創造の物語(19)で見ることが出来る。

### 第三節 終末

神話の中においてはしばしば、大災害が描かれる。有名なものは『旧約聖書』の「ノアの箱舟」に代表される、洪水神話と呼ばれるタイプだろう。神話作者の大林太良は洪水神話の定義を、「原古における大洪水によって世界が破滅し、それまで生きていた人類も、少数の生存者を除いては全滅したが、洪水が引いてからは、また新しい人類の時代が始まった」(20)神話であるとしている。よく知られている「ノアの箱舟」は、洪水によって地上が水浸しになり、全ての生物が死に絶える。しかし、全ての生物の雌雄一組ずつだけが神の用意した箱舟に乗り込んで生き残り、水が引いた後には再び子孫を残していく、と大林太良の定義通りの話である。

私はさらに、洪水神話から三つの要素を見出して説明したい。その三要素とは、「神が洪水を起す原因」、「生き残る人間や生物」、「生き残る方法」の三つである。「神が洪水を起す原因」としては、いくつかの神話で特に理由が存在しない

ものが散見されるものの、ほとんどの場合では人間に対する懲罰が理由(21)である。では、「生き残る人間や生物」はどうなっているのか。まず、「ノアの箱舟」のように人間以外もともに生き残る場合がある。他にも、人間の男女一組だけが残る場合、男女のどちらか片方(22)のみ生き延びる場合、人間を含めて生物すべてが死ぬ場合と多様である。最後に「生き残る方法」だが、箱舟、またはこれに相当する船の代用品に乗り込むものが圧倒的多数を占める中、山や木など、地上より高い場所に登って生き残る話もある。三要素それぞれにおいて、ここで紹介したバリエーションがすべてではもちろんないが、これ以上の紹介は省略する。いま大事なことは、洪水神話がいずれも三要素である程度の説明が可能であるということである。また、洪水神話は三要素の一つに「神が洪水を起す原因」があることからわかるように、世界や人類のリセットをモチーフとして語られることが多い。この点については、「人間に対する懲罰」が理由であることから容易に推測が可能であろう。

しかし、洪水神話の中でも、人間のリセットではなく、明確に世界の終わりを描写している話がいくつか存在する。代

表例としてはキリスト教の「最後の審判」が挙げられる(23)だろう。世界の終わりにイエス・キリストが再臨し、永遠の命が与えられる者と地獄に落ちる者とを分ける話である。また、「ヨハネの黙示録」においては最後の審判に先立って起る大災害が描かれている。

北欧神話の「ラグナロク」も、洪水神話や「最後の審判」と同じ終末神話に含まれる。「ラグナロク」について大林太良は、よくある「起源と原古の状態の神話のしめくりとして過去の出来事のように語られるもの」(24)ではなく、「未来の出来事の形をとって、約束を内容として含んでいるもの」であると述べている。では、このラグナロクとはどういったものなのか、「巫女の予言」より該当節を引用する。

ミームの息子らは戯れ／そして運命ははじまる、  
鳴りひびく／角笛ギョッルの音を合図に。

空にかかげられし角笛を／音たかくへイムダッルは吹く。  
ミームの頭を相手に／オージンは語る。

ユッグドラシルのトネリコが／震えつつ立っている、

老いた木はうめき／巨人は自由の身となる。  
スルトの血族が／それを呑み込むまに  
ヘルで／だれもが怯える。

(中略)

フリユムが東より馳せつけ／体のまえに楯をかまえもち、  
ヨルムンガンドは巨人の怒りに／かられつつ身をくねる。  
蛇は浪を打ちたたき／驚は叫び  
ニズフォルは屍をひき裂き  
ナグルファルは繋ぎがほどける。

(中略)

スルトは南から出かける、／枝の破滅をたずさえて。  
戦死者の神の剣からは／太陽がきらめく。  
岩はくずれ落ち／女巨人らはつまずき倒れ  
人間たちはヘルへの道をたどり／そして天は裂き割れる。

そのときフリーンの／二度目の悲しみが起こる、  
オージンは狼に向かって／戦うとき。／ペリの殺し手は  
輝きながらスルトに向かう。

そのときフリッグの飲びは／倒れるだろう。

(中略)

そのときシグフォズルの／カづよき息ヴィーザルが来て  
屍肉をくらう獣に／むかつて闘う。

かれは両手で／フウエズルング(25)の息の  
心臓に剣をつきたて、／このとき父の仇はそそがれた。

そのときフロージュンの／名だかき息子が来て、  
オージンの息子は／蛇にたち向かい、

ミズガルズの護り手は／怒りつつ撃つ。

人の子らはみな／人の住む世を去るだろう。

フィオルギユンの息子は／おのが死を目の前に  
まむしから九歩のく、／悪評うける恐れなく。

太陽は黒くなり、／大地は海に沈みゆき、

天からは明るい／星たちが消えうせる。

狂いたつのは火／そして炎、

高く燃えあがるほむらは／天そのものに戯れる。

彼女は見る、／ふたたび／たえず緑なる大地が

海原より出でくるを。滝は落下し、／うえを鷲が舞う、  
山のなかで漁するものが。

(中略)

種まかれぬまま／畠は実を結ぶだろう、

災いはことごとく改められるだろう、

バルドルは来るだろう。ホズとバルドル、このふたりは  
フロフトの戦いの地に住む、／戦死者の神々の聖き地に。  
そなたらはまだご存知か——それともいかに？

彼女は見る、／太陽よりも美しく

こがねで屋根を葺かれた館が

ギムレーに立っているのを。

そこには誠ある／人びとが住み

そしてどこしえに幸せを／楽しみ味わうことになる。

そのとき力ある者が／おのが神国に来る、

すべてを統べる／強き者が下る。

(後略)(26)

以上がラグナロクの大まかな全容である。ヘイムダルが角笛を吹くことをトリガーとし、神々とその敵は戦の準備を始める。戦いのなかで、オーデインはフェニリルに噛み殺され、フェニリルはオーデインの息子に殺される。トールはヨルムンガンドの前で後ずさりし、「悪評うける恐れ」なく倒れるとされるが、この描写は相討ちを意味している。そして「太陽は黒くなり」から始まる一節にあるように世界は終焉を迎えるが、二節後の「彼女は見る」以降の節では新たな世界が生まみだされる様子が描かれている。

## 第二章 「ラグナロク」と他の終末神話

「ラグナロク」は北欧神話における終末神話である。では、最後の審判や洪水神話といった、他の終末神話とは何が異なっているのか。「ラグナロク」の特徴を浮かび上がらせるため、アステカの洪水神話である「五つの太陽」、およびキリスト教の「最後の審判」という二つの神話と比較してみたい。

### 第一節 「五つの太陽」

「五つの太陽」は、アステカ神話における創世神話の一つである。『図説マヤ・アステカ神話宗教事典』の「創造譚」の項目では次のように紹介されている。

創造の第一歩として、二人の創造主は、現在の世界に先行した四つの太陽（つまり四つの世界）のうち、最初のものを造る準備をした。ほとんどの系統で四つの太陽は次の順で生まれ、それぞれ最後の日の名前をとって名付けられていた——すなわち、ナウイ・オセロト（四のジャガー）、ナウイ・エカトル（四の風）、ナウイ・キアウイトル（四の雨）、（ナウイ・アトル（四の水）である。それぞれの太陽をつかさどっていた神と人間は、太陽とともに滅びたり、別の生き物に変えられたりした。（中略）第四の太陽ナウイ・アトルは水の女神チャルチウトリクエが司ったが、洪水がこの太陽を葬り、人間は魚になった。（後略）（27）

この項目の著者（28）によると、このような「創造が何度もくり返された」という考え方は、他の時代や現代のマヤ人の間でも見られる共通の特徴のひとつ」（29）であるという。

「五つの太陽」の第四の時代を洪水神話だと考えると、三要素に分けて考えることが可能になる。まず、「神が洪水をおこす原因」では、他の多くの洪水神話と同じように、世界のリセットをモチーフとした物語であるといえる。しかし、「生き残る人間や生物」では、「人間は魚になった」ため、人間としての生存者は一人として存在しない。当然、箱舟や山といった「生き残る方法」については語られない。

また、「五つの太陽」の特徴として、第四の太陽の時代は洪水によって滅びたが、第一から第三の太陽の時代も、それぞれの要因によって、人間は全て滅ぶか、第四と同じように他の生物に変化していることが挙げられる。そのため、時代が代わる度に神は人間（だけでなく太陽や月なども）を創造し直してきた。この流れを考えると、現在である第五の太陽の時代も、これまでの時代と同様にいずれ滅びると考えられている、という推測は決して突飛なものではないだろう。

## 第二節 「最後の審判」

一般に「最後の審判」という場合、最後の時に突如としてイエスが現れ、最後の審判を執り行うというイメージはある

ものの、聖書の中ではどのように語られているか、ということまで知っている者は少ないのではないだろうか。私自身、本論文を執筆するにあたりこの問題に直面した。そして、聖書や「最後の審判」に関わる文献を当たった結果、「最後の審判」という一つの物語があるわけではないことがわかった。つまり、「最後の審判」を研究ないし理解するためにはまず、聖書の各所から最後の審判に関わる描写を見つけ出し、まとめる必要があるのである。例えば、キリスト教図像学者の神原正明は以下のようにまとめている。

実り豊かな時代が過ぎ世の終わりがやってくる。「太陽は暗くなり、月は光を放たず、星は空から落ち、天体は揺り動かされる」（「マタイ」24:29）。雲の中から玉座のキリストが現れ、口からは剣（「イザヤ」49:2）と小枝（「イザヤ」11:4）が顔を出す。そばには十二使徒が椅子に座っている（「マタイ」19:28、「ルカ」22:30）。キリストは彼らとともに人を裁くためにやってきたのだ（「コリント1」6:2）。座っている椅子からは燃えるような火の河が流れ出ている（「ダニエル」7:10）。正しい者には祝福を、不正な者に

は地獄落ちが求められる。十字架が厳肅にキリストの前に立てられ、その上では天使がトロンボーンやトランペットを鳴らす（「マタイ」24:31）。地面は割れて墓が開く（「ユザキエル」37:12、【ヨハネ】5:28-29）。そして死者たちが立ち上がってくる（「マタイ」24:31）。彼らは生きている者とともに裁きの座に着いたキリストの前に集まってくる。

審判は「命の書」に従って（「黙示録」二〇二二、「出エジプト」32:33、「詩篇」69:29、「ダニエル」12:1、7:10）、あるいは秤に掛けられてなされる（「ダニエル」5:27、「ヨブ」31:6）。天詩は選ばれた者と地獄落ちの者に分ける（「マタイ」24:31）。そして一方は樂園へ行き、他方は地獄の火に投げ込まれる。（30）

先述した、「聖書のあちこちから最後の審判に関わる描写を見つけ出しまとめる必要」がこのまともからわかるだろう。また、このまともによると、「最後の審判」は私たちが思っているような、突如としてイエスが現れ、最後の審判を行って人々を天国と地獄に振り分ける、というだけの話ではないこともわかる。最後の審判が行われる前には、まさに世界の終

わりといえる異変が起こるのだ。詳細は主に「ヨハネの黙示録」で語られるが、人間をはじめとして海の生き物や木々、太陽、月、星、といったものの多くが失われる大災厄である。ここで注目しなくてはならないのは、滅びをもたらす者はサタンをはじめとした悪とされる存在ではなく、神自身であることである。

### 第三節 「ラグナロク」

以上、洪水神話を代表してアステカ神話における創造神話である「五つの太陽」と、キリスト教の「最後の審判」を紹介してきた。ここからは、この二つの神話と「ラグナロク」を比較することで「ラグナロク」の特徴を浮かび上がらせていきたい。また、比較の後には、二つの神話と比較しただけでは浮かび上がらなかった特徴についても論じていきたい。まず、「五つの太陽」との比較から何が言えるだろうか。一方は創造神話であり、他方は終末神話であるという差異こそあるが、双方とも大災害によって世界、そして全人類が滅ぶという点では共通している。また、「ラグナロク」のように、すべての神々ではないものの、「五つの太陽」中ではそれぞれの

時代を司った神が死んでいる場合もある。推測が正しいとするならば、滅びが確定した未来として予見されている点も、共通項としては見逃せない。

しかし、「五つの太陽」と「ラグナロク」の間で、何よりも決定的に違う点として、「神々の全滅」と「滅びの後の世界の扱い」を挙げたい。まず、「神々の全滅」についてだが、「五つの太陽」では、時に神が死ぬことはあっても、全滅することはない。死ぬのはその時代を司っていた神のみである。対して「ラグナロク」では、大災厄の後、神々や巨人をはじめとして世界のすべてが滅ぶ。次に「滅びの後の世界の扱い」に関してであるが、「五つの太陽」では主に過去の滅びを語るとともに、暗に未来の滅びも匂わせている。しかし、当然だが、現在に相当するとされる第五の太陽の時代の後に来る、第六の太陽の時代というべき世界の事は語られていない。対して「ラグナロク」では、滅びの後に「とこしえに幸せを樂しみ味わう」世界ができると語られている。滅びの未来の後には新たな世界が生まれるという、次の未来が語られているのである。

次に、「最後の審判」との比較で滅びそのものについて論じ

ていきたい。特に注目しなければならない点は、先に述べた通り、「最後の審判」において災厄を引き起こす者が、サタンをはじめとした悪とされる存在ではなく、神であることである。ゆえに、神や天使は災厄の影響を受けない。反対に、「ラグナロク」においては、災厄を引き起こす者について語ってはいない。災厄を引き起こした原因が、神々の契約違反であることは、「巫女の予言」や「ギルヴィたぶらかし」など、様々な物語の中で語られている。災厄を避けようとする神々に対し、災厄を引き起こそうとし、実際にきっかけを作り出した者（31）も存在する。しかし、強いて言うのであれば、「ラグナロク」における災厄は世界の法則である。ゆえに、契約違反を犯した神々は災厄の被害者となり、世界もろとも死に絶えてしまう。

「最後の審判」の神と「ラグナロク」の神々という二つの神話の間で、滅びをもたらす加害者と、滅びを受ける被害者という差異が生まれた背景には、一神教と多神教の考え方の差があると私は考える。

最後に、比較では紹介しきれなかった点について論じていきたい。「ラグナロク」において引用した「巫女の予言」は、

「そのとき力ある者が／おのが神国に来る、／すべてを統べる／強き者が下る」という言葉で終わっている。この言葉について、これまでの研究者の見解は、「最後の審判」におけるイエスの再臨の影響をうけたものだろうということではほぼ一致している。その上で、研究者の中には、この部分は元々語り継がれていた神話にないとし、「巫女の予言」の詩人がキリスト教の影響を受けて意識的、ないしは無意識的に加えたものであるから削除しても構わない、もしくは、削除しなければ北欧神話が正しく理解できない、と考える者もいる。しかし、ほとんどの研究者の立場はむしろ、キリスト教の影響があるという事実を認めたくえで、「巫女の予言」の詩人は北欧の神々への信仰があり、かつての北欧の神々への信仰を知る資料として十分な価値を持つものと考ええる方が一般的である。(32) 私自身も、宗教哲学者の尾崎和彦やノルダルらとともに、こちらの意見を支持したい。

### 第三章 女神ヘル

ヘルという女神(以下女神ヘルと表記。対して、ヘルという世界を表す場合ヘルヘイムと表記する。また、女神ヘルと

ヘルヘイムの二つの意味を同時に含む場合はただヘルとのみ表記する)にはあまりなじみがない人が多いのではないかと思う。そのため、まずは種々の事典類を総合し、女神ヘルについて簡潔に三点ほど紹介したい。

一つ目は、その名前の意味である。ヘル(hell)の語は『(死者を)隠すもの』『隠す場所』(33)を意味している。また、ヘルと聞いてまず連想するであろう、地獄を意味する英語「hell」とも語源を同じにしている。

二つ目は女神ヘルの家族構成である。女神ヘルは、父に北欧神話のトリックスターであるロキ、母に苦悩の運び手を意味するとされる巨人アングルボザを持つ。また、兄弟として、オーデインを噛み殺した狼のフェンリルと、トールと相討ちになった大蛇のヨルムンガンドがいる。

三つ目は女神ヘルが死者の国を治めている経緯である。女神ヘル、および彼女を含む三兄弟は、誕生後すぐにオーデインなどの神々によつて、神々の居住区であるアスガルズから追放される。このときから女神ヘルは、「ニブルヘイムに投げ込まれ、死者の国を治めることになった」(34)とされる。

この章の一節では女神ヘルが生まれてから追放されるまで

について論じていく。その上で、私の感じた疑問を浮かび上げさせたい。

二節では、一節を踏まえた上で、女神ヘルが主要な神として登場する物語を用いながら、考察を進める。

三節では、女神ヘルとヘルヘイムの関係について、原典と事典を適宜用いながら紹介する。その後、結論へとつながる一つの仮説を展開していく。

本来であれば、女神ヘルとヘルヘイムについて論じるためには、北欧神話の宇宙論、特に「巫女の予言」に関わる大きな問題についても論じる必要がある。しかし、この問題は本論文で扱うには大きすぎるため、触れるにとどめることとする。

### 第一節 女神ヘルの誕生と追放

女神ヘルはロキとアングルボザの間に生まれ、神々の手で追放された。この点に関して、まずは「ギユルヴィたづらかし」でどのように語られているか読んでほしい。

ロキはほかにもたくさん子供をもっていた。(35) ヨー

ルンヘイム(36)にアングルボザという女巨人がいるが、ロキはこの女との間に三人の子供をつくっている。第一が、フェンリスウールヴ(37)、第二がヨルムンガンド、すなわちミズガルズの大蛇、第三がヘルだ。(中略)万物の父は、神々を使いによって、その子供たちを捕えてつれてくるようにいつけた。そして彼らが彼のところにやってくるとう、オーデインはその蛇を、すべての国々をとりまく深い海洋の中へ投げ込んだ。(中略)オーデインはヘルをニヴルヘイムに投げ込み、九つの世界を支配する力を彼女に与えて、彼女のところに送られるすべての者たちに住居を割り当てることができるようにした。それへ投げ込んだ。(中略)。オーデインはヘルをニヴルヘイム(38)に投げ込み、九つの世界を支配する力を彼女に与えて、彼女のところに送られるすべての者たちに住居を割り当てられるようにした。それは、病気で死んだ者と寿命が尽きて死んだ者たちだ。(中略)。彼女は半ば青色で、半ば人肌色をしているので、すぐそれとわかる。どちらかというところ、恐ろしい顔つきをしている。(39)

引用中では、まずヨルムンガンドが海へと追放された後、女神ヘルが追放される。しかし、女神ヘル追放の際の神々の行為には、一つ不思議な点がある。それは、神々がヘルを追放するにあたり、ニブルヘイムへ送るだけでなく、「九つの世界を支配する力を与えて、彼女のところに送られるすべての者たちに住居を割り当てることができるように」したという点だ。(40) 仮に、この力を初期からヘルが備えていたため、死者の国を治めるという役割を与えられたのなら、このような疑問は出てこなかった。しかし、書かれていることを素直に読む限りにおいて、最初から備えていたものではないことは明らかである。なぜ、神々はわざわざ、「九つの世界を支配する力」を、女神ヘルへ与えたのだろうか。災厄をもたらす、と予言されている者に与える力としては、強大すぎる力ではないだろうかと私は考える。

残念ながら、この問題について論じた研究は見つからなかった。しかし、代わりに、事典や文学となった際にこの問題を解釈したと見られるものは、二つ見つけることができた。一つ目は、イギリスの児童文学作家であるM・クロスリー<sup>11</sup>。ホランドが、北欧神話を児童文学として訳したものである。

その中では、「死者たちの、世話をするように」(41) したとある。二つ目は、『世界の神話百科』での「ヘル」の項目である。こちらでは、「管理を課した」と説明している。どちらも、冥界の主となったことについて、神々によって罰を与えられた、という解釈を行っている。確かに、これらのような解釈ならば問題は解決するだろう。しかし、この解釈は的を射たものではないと私は考える。理由としては、ただ罰として与えられたとするには、大きすぎる力であることが挙げられるのだが、この点については次節で詳しく論じていきたい。

## 第二節 バルドルの死

バルドルとはオーディンとフリッグの間にできた神である。「ギルヴィたぶらかし」の中で紹介された際には、「最もすぐれた神で、誰一人彼をたたえない者はいない」、「容貌が、それは美しく、輝いている」、「アース神の中で最も賢く、雄弁で優しい神」(42) と言われている。水野はこれらの表現に対し「最上級の形容詞が連続している」とし、「何ひとつ欠点がないように見える」(43) と評している。また、「巫女の予言」の中においては、ラグナロクが起こる前に一度死ぬ

が、世界が滅びた後に復活すると語られている神でもある。バルドルという神が死ぬ物語は「ギユルヴィたぶらかし」で詳しく語られており、「神々および人々にふりかかった最も不幸な出来事」(44)とまで言われている。ノルダルも、「巫女の予言」でバルドルの死が語られる際の語り口から、「詩人が本詩においてこの事件をいかに強調しているかを示している」(45)と述べている。では、「巫女の予言」の詩人と「ギユルヴィたぶらかし」を書いたスノリ、両者がともに重大だとした物語はどのようなものなのか。「ギユルヴィたぶらかし」の内容を要約して示す。

物語は、バルドルが自分の死を予言する夢を見ることから始まる。両親であるオーデインとフリッグをはじめとするアース神に夢のことを告げると、神々は相談し、オーデインは死んだ巫女を復活させて話を聞くためにヘルヘイムへ向かい(46)、フリッグはこの世界のすべてのものにバルドルを傷つけないよう誓わせることにした。そして世界のあらゆるものがバルドルに危害を与えなくなった後、神々の間で、輪になってバルドルへ向かって物を投げるといふ遊びが流行した。しかし、ロキはこの遊びを気に食わず、フリッグに「バ

ルドルに指一本触れぬと、何もかも誓いを立てたのでございませうか」(47)と聞いた。対してフリッグは西にあるヤドリギは誓いを立てるにはまだ幼いため見逃したと答えてしまふ。すぐにロキはそのヤドリギを取ってきて、輪の外にいたバルドルの兄弟であるヘズという神に、ヤドリギを投げるよう話しかけた。ヘズは盲目だったため断るが、ロキが方向を指し示してくれるということなので了承した。そうして投げられたヤドリギは矢に変わり、バルドルを射殺してしまふ。ここまですバルドルが死ぬまでの要約である。バルドルが死ぬということに対して、予言が伝えられた時点で、既に神々が動揺していることがわかるだろう。そして、バルドルが死んだ際、オーデインは「誰よりも胸にこたえた」(48)と表現されている。理由として、この表現の直後に「バルドルの死が、アース神たちに、どんなに大きな損失であるかを誰よりも見通していた」(49)と語られる。では、オーデインは何を見通していたのか。明らかにしている詩は「古エツダ」および「スノリのエツダ」には存在しない。しかし、推測することは容易だろう。いかにバルドルが他の神々から愛されていたとしても、その死を悼む表現に「見通していた」とい

う表現が使われることはおかしいからだ。「見通していた」と表現される以上、未来の出来事が関わっているに違いない。となると、やはりラグナロクに関することだと考えるのが自然ではないだろうか。つまり、オーデインは、バルドルの死が、ラグナロクに繋がるトリガーの一つだと「見通していた」のだ。次の段落からは、バルドルが死んだ後の要約の後、前節で述べた「罰として与えられたとするには大きすぎる力」だと考える理由を示していきたい。

バルドルが死んだ後、神々は葬儀の準備を始める(50)のだが、その際にフリッグは「冥府への旅路につき、そこでバルドルを見つけ出して、彼をアスガルズに返してくれるように、ヘルに身代金を差し出す者はいないか」(51)と言った。つまり女神ヘルの元へ行ってバルドルを連れ戻してきてほしい、ということだ。そして、オーデインの子であるヘルモーズという神が行くこととなった。ヘルモーズはヘルヘイムへ辿り着くと、そこにいたバルドルと一夜を過ごし、翌朝になって女神ヘルに頼み込んだ。女神ヘルは「バルドルが噂どおり、皆に愛されているかどうか、調べてみなければならぬ」(52)とし、「もし世界中のものが、生きているものも、死

んでいるものも、彼のために泣くなら、彼をアース神のもとに戻そう。だが、誰かが、それを拒み、泣こうとしないなら、ヘルのもとに留まるのだよ」(53)と約束をした。ヘルモーズが神々のもとへ帰ると、すぐに神々は世界中のすべてのものに泣いてもらうよう頼んだ。しかし、とある洞窟にいた老婆(54)は泣くことを拒んだため、バルドルが神々の下へ返ってくることはなかったのである。

読んでわかる通り、女神ヘルは神々の「バルドルを返してほしい」という頼みは無条件で受け入れてはいない。あくまで、条件付きの契約を交わしたのみである。もしも、女神ヘルの力が、神々より罰として与えられたものであるならば、条件を出すどころか、契約をすることすら不可能だろう。神々の側から見ても、頼むようなことはせず、返せと迫ればよいだけである。条件を出し、満たせないならば要求を拒むことができる以上、神々と女神ヘルは同等の立場であると考へざるを得ない。

### 第三節 女神ヘルとヘルヘイム

ここで一度、女神ヘルとヘルヘイムについて整理したい。

女神ヘル＝ヘルヘイムの等式はこれまでの先人たちの研究で明らかにされてきた。事典類の中でも女神ヘルの項目で『冥府』の擬人化(55)や、ヘルの語が「地獄の女神と同じ時に死者の王国をもさす」(56)と説明されている。この等式を端的に示すのは、「ギルヴィたぶらかし」において、ヘルモーズがヘルヘイムへ向かう際に行われた問答だ。ヘルヘイムへと続く橋の番をしている娘が「なぜ、あなたはこのヘルにやってきたのですか」と問うと、ヘルモーズは「わたしはヘルまで行って、バルドルを探さなくてはならないのだ」(57)と答える。この問答の中においては、ヘルの語が女神としてではなく、明らかに場所としての意味で用いられていることがわかるだろう。

また、問答の直後には「ヘルの垣根」を飛び越えるという描写や、「ヘルへの道は下りで北に向かっています」という娘の言葉もある。前者におけるヘルの語が、場所を表していることは容易に理解できるだろう。ただし、後者の娘の言葉は少しわかりにくい。フリーの著述家として活躍するヴァルター・ハンゼンは、この一文を「この路は北のヘルの国に通じている」(58)と訳した。ハンゼンの功績は、シュリーマン

がトロイア戦争の遺跡を発掘したように、神話の描写からアイスランドのどの場所が神話の舞台となったのかを明らかにしたことだ。もちろん、特定された場所の中にはヘルヘイムも含まれている。そして、娘の言葉も、ヘルヘイムの特定に使った描写の一つである。ならば、やはり娘の言葉においても、ヘルという語は女神ではなく場所の意味で使われていると考えると差し支えないだろう。

では、女神ヘル＝ヘルヘイムという等式が成り立つことを前提とし、人々の生活やそれに伴う信仰意識の変化も考慮に入れた上で、この問題に対する一つの仮説を立てるならば、元々存在した冥界の概念とその女神に対し、別の神を上位に持つてこさせるために語られた、と考えられないだろうか。この仮説は、神話学の観点からすると特段突飛なものではない。多神教において、生活環境の変化に伴い、主神が交代していく現象は、珍しいことではないからだ。この変化が行われた神話を神話学では特に交代神話と呼んでいる。現在、北欧神話の主神とされているオーディンが主神の立場を得る以前には、農耕神としてトール(59)が、さらに古くは天空神としてテュール(60)が信仰されていた(61)ことがわか

っている。また、序で述べた悪霊としてのオーディンや、日本の土蜘蛛伝承に代表されるように、神話中では、本来の位置から貶められて語られる場合も多々ある。ならば、女神ヘルも本来の役割を他の神に取られたり、地位を貶められたりしている、という可能性は十分に考えられるのではないだろうか。

この仮説を裏付けるため、神話学の観点から、オーディンとトールの主神交代について考えていく。牧畜や農耕を主としていた時代に、戦の神であるオーディンが主神の地位を占めていたとは考えにくい。対して、トールは、一般的なイメージである雷神の側面の他に、農耕神として豊穰を司る側面も持つ。もちろん、トールには牧畜の神としての資質も十分に備えている。トールには山羊を祝福する話も多々残されているのだ。有名なものを挙げるならば、巨人ウートガルザ・ロキに会いに行った話の道中、自身の山羊を殺して農家の一家と共に食べ、翌朝その山羊を復活させたというものがある。であるならば、やはりオーディン以前に主神の位置にいた神として、トールの名を挙げることは順当だといえる。

また、戦死者の楽園であるヴァルハラ概念も、オーディン

ンと同様の理由により、後からできたものだと考える方が自然である。ヘルヘイムに関して、「古くは死者はすべて冥府ヘルへ赴くと思われていたが、戦死者の楽園ヴァルハラ概念の成立とキリスト教の地獄の影響から、冥府とその女王の姿も変化したらしい」（62）と言う研究者もいる。オーディンの交代を見る限りにおいて、初期の北欧神話から現在の形に至るまでに、冥界の概念が変化していったことは疑いようがないだろう。

女神ヘルへの信仰について考えるならば、興味深い話が伝わっている。その話とは、自身の下へ送られてきた死者の爪を使って、ナグルファルという船を造っているというものだ。この船はラグナロクの際、巨人フリウムとフリウムが率いる軍勢を乗せて出港する。しかし、この軍勢がどのような働きをしたのかまでは語られていない。ナグルファルについて、スノリは「ギルヴィたぶらかし」で当時の慣習を語ってくれている。「人が爪をのばしたまま死ぬのはいけない、といわれるのはもつとも」だ、という部分がそうだ。人が死んだら爪を切る、という小さい慣習ではある。しかしこの慣習からは、女神ヘルが、かつてのいずれかの時代において、現在知

られているような怪物としてではなく、一人の女神として確かに信仰されていたのだらうということが窺えないだろうか。

## 結論

結論に入るに先立ち、まずは本論文で掲げた問いを思い返したい。それは、「女神ヘルがラグナロク、または北歐神話全体を通してどのような役割を担っていたのか」というものであった。また、この問いに至ったそもそもの疑問も同様に思い返そう。こちらは、「災厄をもたらすとされた女神ヘルが、ラグナロクにおいて目立った働きをしない」というものであった。

では、この問いと疑問を念頭に置き、女神ヘルについて、これまでの議論をまとめていこう。女神ヘルは、神々によって神々の居住区アスガルズからヘルヘイムへと追放された。にもかかわらず、追放に際して世界を司る力を与えられ、神々と同等の立場にある。また、追放された場所であるヘルヘイムと等式関係にもあった。その他にも、女神ヘルとフェ

ンリル、ヨルムンガンドの三人は兄弟であることや、ナグルファルという船を造り、ラグナロクの際に巨人の軍勢を送り込む役割を担っていることも紹介した。しかし、ラグナロクに際して、「災厄をもたらす者」だとされる三兄弟のうち、フェンリルはオーデインを、ヨルムンガンドはツールを殺すという大役を担っていることに比べれば、女神ヘルの働きに対して、物足りないという感想を抱くのは私だけではないだろう。

小説家の鎌池和馬は、神々が女神ヘルを追放した際に、なぜ「九つの世界を支配する力を与えた」と描写されたのか、という問題に対して、彼なりに解釈した小説を書いている。小説の中で紹介されるこの解釈とは、「オーデインと全く同種の、『一人目の主神』なのではないか」（63）というものである。一見すると、研究者でもない一小説家の極端な、荒唐無稽そのものの仮説にみえるかもしれない。しかし、鎌池は小説の中で女神ヘルとオーデインには「九つの世界全てを支配する権利」（64）以外にも、「死者を管理する」という共通点を示している。熟慮せず、ただ一笑に伏すのみで済ますことは少し早計ではないだろうか。

鎌池のこの仮説について考えるにあたり、比較神話学者の水野知昭が行った、ヨルムンガンドの語源への考察をみていきたい。議論の詳細を省き、結論から述べるが、ヨルムンガンドは「大いなる魔法の樹」や「最大無比なる杖」という意味でとらえることができ、これらの特性は母であるアングルボザが女神であったときに所持していた権能を表すとした。その上、水野はアングルボザをただの女神ではなく、テュールの妻だとしている。テュールが、オーデインやトールが主神となる以前、その地位にあつた天空神だと考えられていることは既に述べたとおりである。しかし、肝心のテュールの妻について、主神であつた時代、現在の形の北欧神話の時代、双方において詳細を知ることのできる資料は皆無である。ただ、存在は示唆されており、「ロキの口論」の中でロキがテュールを罵倒する際の言葉に「お前の女房はな、おれと寝て子供をこしらえやがつた」(65) というものがある。

水野の考察は古キゲルマン諸語や文献を用いたものであり、十分信頼に足るものだと私は考える。そして、ヨルムンガンドがアングルボザの内に含まれるという関係が正しいのならば、他の兄弟であるフェンリルや女神ヘルとアングル

ボザの間にもなんらかの関係がある、と考えるのは私だけではないだろう。

ではまず、フェンリルとの関係について探っていきたい。神々がフェンリルを追放するまでの間、世話役を担っていたのは他でもないテュールである。「ギルヴィイたぶらかし」では「餌をやる勇氣をもっている」のはテュールだけだと語られている。(66) その上、テュールと同一だとされるケルト神話の天空神ダグザは隻腕であるのだが、テュールは他でもないフェンリルによつて隻腕にされるのだ。ゆえに、フェンリルとテュールの間には、何らかの関係がある、とみることができる。

次に女神ヘルとの関係について探っていく。ラグナロクにおいて、テュールが相討ちで倒す怪物はガルムだと語られている。このガルムという怪物は、他でもないヘルヘイムの番犬である。さらに水野は、アングルボザが女神であつたとき、「豊穰と生と死(67)」を司っていたとしている。また、実は冥界の女神で豊穰をつかさどる女神が他の神話に存在する。ギリシア神話のペルセポネだ。(68) 彼女も元々は豊穣を司る女神であつたが、話の中で冥界に落ち、死を司る冥界

の女神という属性を帯びるのだ。改変された時期が大きく違うため、二人の女神の属性が似通ったことは偶然だろう。しかし、豊穰の女神は、同時に死や冥界という属性を含むという暗黙の了解があった、と考えることもまた可能である。現在の北欧神話でも、多産と性愛という、神話学では豊穰の権能の内に含まれるものを象徴する、フレイヤという女神が死の概念を所持しているのだ。だとするならば、女神ヘルとアングルボザの間に、何も関係がないとは考えられない。

これで、女神ヘルがラグナロク中で活躍しない理由について、推測が可能となった。女神ヘルは、かつて主神であったテュール、その妻の側面なのではないだろうか。鎌池の仮説である「二人目の主神」ではなかった。しかし、ただの冥界の女神でもなかったのだ。そして、主神の妻であったならば「九つの世界を支配する力」を持つていることはむしろ当然である。また、フェニリルやヨルムンガンドと根を同じくし、アングルボザから生と死を司る権能を受け継いでいるならば、「オーデインを脅かす存在」として両者に見劣りする存在ではなくなるだろう。元々持っていた力を「与えた」と語られていることについての問題も、トールやオーデインへ主

神の位置が交代していったことを考えることで、容易な解決が可能である。

本論文では考察することができなかったが、タキトウスの『ゲルマーニア』にも興味深い記述があった。(69)それは、「エルベ下流地方よりユトランド半島の北部」、現在でいうところのデンマーク中部以南からドイツ北東部では、「ネルトウス」という女神を信仰していたということである。この女神は大地、すなわち豊穰の女神である。また、語源はどうやら「地下」に関係があるらしい。

以上、女神ヘルの北欧神話中の役割について論じてきた。できる限りの根拠を示したつもりではあるが、私自身の推測が多分に含まれていることは否めない。この論文を引っかけに、更なる考察が行われることを願って結びとしたい。

## 注

(1) 以降の本論中でアイスランドや、その他の北欧諸国について述べているときは以下を参照している。山室静『サガとエッダの世界・アイスランドの歴史と文化』文元社、二〇〇四年、および武田竜夫『バイキングと北欧神話』明石書店、二〇〇五年、百瀬宏『ほか編』『北欧史』山川出版社、一九九八年。

(2) 北欧神話における語句は、訳者によって表記に揺らぎがあるが、基本として論中に用いる場合は『エッダ―古代北歐歌謡集―』の表記に従い、引用文中は引用元の表記に従うものとする。引用元の表記が論中で用いているものと違った場合、初めて出てきた際にのみ、注をつけて補足する。その語句が初出の場合は、論中に用いる表記を共に示す。また本論文で用いる一次資料について、「巫女の予言」はアイスランド詩の権威であるシーグルズル・ノルダルの著書『巫女の予言 エッダ詩校訂本』を、その他は北欧文学研究者である谷口幸雄の著書『エッダ―古代北歐歌謡集―』を用いる。

(3) 山室静『北欧の神話』筑摩書房、二〇一七年、六三頁。

(4) 通常終末に関する物語は終末論と呼ばれるが、本論文中においては他の神話類型との比較上の便宜を考えて「終末神話」と表記する。

(5) 松村一男『神話学講義』角川書店、一九九九年、七頁。

(6) 松村一男『この世界のはじまりの物語』白水社、二〇〇八年、一九二〇頁。

(7) 説明神話ともいう。

(8) V.G.ネッケル『ほか編』『エッダ―古代北歐歌謡集―』谷口幸雄訳、新潮社、一九七三年、四六頁。ヴァフズルーズニルの歌、二〇二二節。

(9) 松村一男『この世界のはじまりの物語』白水社、二〇〇八年、二四頁。盤古神話と呼ばれるこの神話について、松村は「これは中国で多数派を占める漢民族に伝わる物語」と加えている。

(10) 北欧神話ではユミル、中国神話では盤古という巨人、バビロニア神話ではティアマトという巨大な神が使われている。

(11) 他に、「散文エッダ」や「新エッダ」とも呼ばれるが、本論文では「スノリのエッダ」で統一する。また、「古エッダ」

は「詩のエッダ」やその他様々な呼称があるが、「古エッダ」で統一する。

(12) シーグルズル・ノルダル『巫女の予言 エッダ詩校訂本』菅原邦城訳、東海大学出版会、一九九三年、二〇・二二頁。また、以降、注や本文で原文を引用する際、改行は／で表す。

はるかなる時のはじめ／なにひとつ在るものはなかった。

砂も海もなく、／冷たき波もなかった、

大地はまったくなく／高き空もなかった。

在りしは大きく開きしうつろ、

また草はいずこにもなかった。

ブルの息子らが／大地をもち上げるまで、

名だかきミズガルズを／形づくりし者たちが。

太陽は南から／地上の岩石を照らし、

このとき大地は／みどりの草が萌えいでた。

月のみちづれ／太陽が南から

天のへりの上に／右の手を投げ置いた。

太陽は知らなかった／おのれがいずこに館をもつのか、  
月は知らなかった、／おのれがいかなる力をもつのか、  
星たちは知らなかった／おのれがいずこに位置するの  
かを。

そのとき諸神はみな／力の座へとおもむいて、  
いと聖き神々は／このことを相談した。

夜とその孫子に／その名をあたえ、

朝方と真昼に／午後と夕方に

その名をつけた、／ 月で時を算えるために。

(13) 同上書、一三四頁。この点について尾崎和彦は「世界の創成・始原・原構造のごときは、およそ人間の精神によって把握可能な対象足りえないとする彼の厳しいリアリズムの精神に起因する」と言っている（尾崎和彦『北欧神話・宇宙論の基礎構造―「巫女の予言」の秘文を解く―』白鳳社、一九九四年、一三〇頁）。

(14) 同上書、一三四頁。

(15) 同上書、二二頁。アスク (Ask) はトネリコの意である。しかしエンブラ (Embla) は未だなんの植物かわかって

いない。木を用いた火起こしが男女の性交のイメージと結びつく神話が他にあることから、少なくとも柔らかい木であろうと推測されている。

(16) ここていう三人は、後の詩節で出てくる通りオーディン、ヘーニル、ローズルだと考えられている。

(17) 現在知られている北欧神話はアイスランドに伝えられていた物語がほとんどであることは既に注で示した。そのため、その他の北欧諸国ではなく、アイスランドの土地柄に由来すると考えられる描写が神話の随所に認められる。この部分で、用いられた木は流木である、という解釈も、アイスランドで語られていたことから推測されたものである。

(18) 松村一男『この世界のはじまりの物語』白水社、二〇〇八年、六四頁。

(19) 同上書、七五頁。ギリシア神話において男性の創造は言及されていないが、ローマ時代には人間の味方をしたプロメテウスが水と土から人間を作ったという言い方が見られるようになる。

(20) 大林太良『ほか』編『世界神話事典 創世神話と英雄伝説』、角川学芸出版会、二〇一二年、一一〇頁。

(21) 大林太良はこの点について、大航海時代以降のキリスト教とイスラームの宣教によって、土着の洪水神話を変容させた可能性もあると考えている。

(22) 多くの場合男性。

(23) ただし、最後の審判という概念自体はキリスト教に特有のものではなく、ユダヤ教とイスラーム、それ以前にはゾロアスター教にも認められる。

(24) 大林太良『神話学入門』中央公論社、一九六六年、八五頁。直後の引用も同一頁。

(25) フェンリルのこと。

(26) シーグルズル・ノルダル『巫女の予言 エッダ詩校訂本』菅原邦城訳、東海大学出版会、一九九三年、三一・三七頁。中略、後略部分は、ラグナロクの描写であるが省略しても構わないと判断した節である。参考資料には、改行を資料の通りに行い、かつ省略部分を含めたものを掲載してある。

(27) メアリ・ミラー、カール・タウベ編『図説マヤ・アステカ神話宗教事典』武井摩利訳、東洋書林、二〇〇〇年、二〇一頁。

(28) 著者不明。事典が二人によって書かれているため、ど

ちらかである。

(29) メアリ・ミラー、カール・タウベ編『図説マヤ・アステカ神話宗教学事典』武井摩利訳、東洋書林、二〇〇〇年、二〇一頁。

(30) 神原正明『天国と地獄 基督教からよむ世界の終焉』講談社、二〇〇〇年、五九六〇頁。

(31) 第三章第二節で詳細を論じるが、ロキと呼ばれる神のこと。

(32) 「巫女の予言」そのものに対する考察は以下を参照。  
シーグルズル・ノルダル、『巫女の予言 エッダ詩校訂本』菅原邦城訳、東海大学出版会、一九九三年、および尾崎和彦『北歐神話宇宙論の基礎構造 「巫女の予言」の秘文を解く』白凰社、一九九四年。この問題そのものは、本論文の本旨に大きく影響しないため、触れるにとどめる。

(33) 松村一男『ほか』編『神の文化史事典』白水社、二〇一三年、四七九頁。

(34) 同上書、四七九頁。

(35) この文は、女神ヘルを含む三兄弟以外に、災厄をもたらす怪物がいることを示しているわけではない。引用した以

前の文で、ロキが妻シギユンとの間に子供をもうけていることを受けての文である。

(36) 巨人の国。ヨトゥンヘイムと表記されることが多い。以降の文中ではヨトゥンヘイムと表記する。

(37) フェンリルのこと。

(38) ニブルヘイムと同義。本文中ではニブルヘイムと表記する。「ギユルヴィたぶらかし」では「ニヴルヘイムができたのは、大地が作られる何代も前のことだ。その真中に、フヴェルゲルミルという泉」があつて、そこから幾筋も川が流れているとされる。第二節で触れる「ヘルの垣根」のそばを流れるギョル川もここで紹介されている。また、山室静は「闇と霧にとざされた、たいへん寒い世界」と紹介している(山室静『北欧の神話』筑摩書房、二〇一七年、一六頁)。

(39) V.G.ネッケル『ほか』編『エッダ—古代北欧歌謡集—』谷口幸男訳、新潮社、一九七三年、二四八—二四九頁。

(40) 谷口幸男だけでなく、北欧文学者の菅原邦城は「九つ世界の支配権を与えた。それで彼女は、自分のもとに送られてきた者たちに住まいを割り当てることになった」と訳している(菅原邦城『北欧神話』東京書籍、一九八四年、二五三

頁)。

- (41) K・クロスリイ・ホランド『北歐神話物語』山室静、米原まり子訳、青土社、一九九一年、八四頁。
- (42) V.G:ネッケル[ほか編、『エッダ—古代北歐歌謡集—』谷口幸男訳、新潮社、一九七三年、二四四頁。
- (43) 水野知昭『生と死の北歐神話』松柏社、二〇〇五年、一九六・一九七頁。
- (44) V.G:ネッケル[ほか編、『エッダ—古代北歐歌謡集—』谷口幸男訳、新潮社、一九七三年、二七二頁。
- (45) シーグルズル・ノルダル『巫女の予言 エッダ詩校訂本』菅原邦城訳、東海大学出版会、一九九三年、一九六頁。
- (46) オーデインがヘルヘイムへ向かうのは「古エッダ」の「バルドルの夢」という物語であるが、一緒に紹介した。
- (47) V.G:ネッケル[ほか編、『エッダ—古代北歐歌謡集—』谷口幸男訳、新潮社、一九七三年、二七〇頁。
- (48) 同上書、二七二頁。
- (49) 同上書、二七二頁。
- (50) 詳細な論述は割愛する。
- (51) V.G:ネッケル[ほか編、『エッダ—古代北歐歌謡集—』谷口幸男訳、新潮社、一九七三年、二七二頁。
- (52) 同上書、二七二頁。
- (53) 同上書、二七二・二七三頁。
- (54) 後にロキの変装であったことがわかり、罰せられる。
- (55) 松村一男[ほか]編『世界女神大事典 = the Encyclopedia of the Goddess』原書房、二〇一五年、四〇二頁。
- (56) 篠田知和基、丸山顯徳編『世界神話伝説大事典』勉誠出版、二〇一六年、八五二頁。
- (57) V.G:ネッケル[ほか編、『エッダ—古代北歐歌謡集—』谷口幸男訳、新潮社、一九七三年、二七二頁。
- (58) ヴアルター・ハンゼン『アスガルドの秘密…北歐神話冒険紀行』小林俊明、金井英一訳、東海大学出版会、二〇〇四年、一九五頁。
- (59) トールは、原語の発音に近づけてソールと表記されることも多い。オーデインとの交代については、以下を参照。アーサー・コツテル『世界神話辞典』左近寺洋子[ほか]訳、柏書房、一九九三年、一三八・一三九頁、および山室静『北歐の神話』筑摩書房、二〇一七年、七〇・七一、一一三・一一四頁。

(60) チュールとも表記される。オーデンとの交代については以下を参照。アーサー・コッテル『世界神話辞典』左近寺洋子[ほか]訳、柏書房、一九九三年、二二二頁、および松村一男[ほか]編『神の文化史事典』白水社、二〇一三年、三三三頁、菅原邦城『北欧神話』、東京書籍、一九八四年、二二三―二二四頁。山室静『北欧の神話』筑摩書房、二〇一七年、一四七―一四八頁。

(61) 山室静『北欧の神話』筑摩書房、二〇一七年、一一五―一一八頁。

(62) 松村一男[ほか]編『神の文化史事典』白水社、二〇一三年、四七九頁。項目著者は野内清香。

(63) 鎌池和馬『とある魔術のヘヴィーな座敷童が簡単な殺人妃の婚活事情』電撃文庫、二〇一六年、二二九頁。

(64) 同上書、一三八頁。

(65) V.G.ネッケル[ほか]編、『エッダー―古代北欧歌謡集』谷口幸男訳、新潮社、一九七三年、八四頁。

(66) 同上書、二四九頁。

(67) 括弧内の表現は以下を参照。水野知昭「古北欧の「中つ国」と「根の国」」、『人文科学論集』信州大学文化コミュニケーション

ケーション学科編、第39号、二〇〇一年、一一六頁。および、同氏「滅びゆく神々への哀歌―「巫女の予言」の語りの構造―」、『人文科学論集』信州大学文化コミュニケーション学科編、第35号、二〇〇五年、一三三頁。

(68) ペルセポネの紹介は以下を参照。松村一男[ほか]編『神の文化史事典』白水社、二〇一三年、四八二頁。および松村一男[ほか]編『世界女神大事典 = the Encyclopedia of the Goddess』原書房、二〇一五年、三三三頁。アーサー・コッテル『世界神話辞典』左近寺洋子[ほか]訳、柏書房、一九九三年、二五五頁。

(69) 以降の文は以下を参照。タキトウス『ゲルマーニア』泉井久之助訳註、岩波書店、一九七九年、五九六―二頁、一九一―九八頁。

## 参考文献

### 一次文献

・V.G.ネッケル[ほか]編『エッダー―古代北欧歌謡集』谷口幸男訳、新潮社、一九七三年。

・山室静『北欧の神話…神々と巨人のたたかい』筑摩書房、一九八二年。

・シーグルズル・ノルダル『巫女の予言 エッダ詩校訂本』菅原邦城訳、東海大学出版会、一九九三年。

・M・クロスリイ||ホランド『北欧神話物語』山室静、米原まり子訳、青土社、一九九一年。

## 二次文献

・ヴァルター・ハンゼン『アスガルドの秘密…北欧神話冒険紀行』小林俊明、金井英一訳、東海大学出版会、二〇〇四年。

・水野知昭『生と死の北欧神話』松柏社、二〇〇二年。

・W.ラーニッシュ『図説』北欧神話の世界』吉田孝夫訳、八坂書房、二〇一四年。

・H.R.エリス・デイヴィッドソン『北欧神話』米原まり子、一井知子訳、青土社、一九九二年。

・尾崎和彦『北欧神話・宇宙論の基礎構造―「巫女の予言」の秘文を解く―』白鳳社、一九九四年。

・菅原邦城『北欧神話』東京書籍、一九八四年。

・山室静『サガとエッダの世界…アイスランドの歴史と文化』

文元社、二〇〇四年。

・武田竜夫『バイキングと北欧神話』明石書店、二〇〇五年。

・百瀬宏[ほか]編『北欧史』山川出版社、一九九八年。

・山室静『北欧の神話』筑摩書房、二〇一七年、63頁。

・神原正明『天国と地獄 基督教からよむ世界の終焉』講談社、二〇〇〇年。

・大林太良『神話学入門』中央公論社、一九六六年。

・松村一男『神話学講義』角川書店、一九九九年。

・松村一男『この世界のはじまりの物語』白水社、二〇〇八年。

・メアリ・ミラー、カール・タウベ編『図説マヤ・アステカ神話宗教事典』武井摩利訳、東洋書林、二〇〇〇年。

・鎌池和馬『とある魔術のヘヴィな座敷童が簡単な殺人妃の婚活事情』電撃文庫、二〇一六年。

・タキトウス『ゲルマニア』泉井久之助訳註、岩波書店、一九七九年。

・松村一男[ほか]編『神の文化史事典』白水社、二〇一三年。

・松村一男[ほか]編『世界女神大事典 = the Encyclopedia of the Goddess』原書房、二〇一五年。

- ・アーサー・コッテル『世界神話辞典』左近司祥子訳、柏書房、一九九三年。
- ・篠田知和基 丸山顯徳編『世界神話伝説大事典』勉誠出版、二〇一六年。
- ・大林太良〔ほか〕編『世界神話事典 創世神話と英雄伝説』角川学芸出版会、二〇一二年。
- ・小野一之〔ほか〕編『人物伝承事典』東京堂出版、二〇〇四年。
- ・大隅和雄〔ほか〕編『日本架空伝承人名事典』平凡社、二〇一二年。
- ・青木周平〔ほか〕編『日本神話事典』大和書房、一九九七年。
- ・水野知昭「古北欧の「中つ国」と「根の国」」、『人文科学論集』信州大学文化コミュニケーション学科編、第39号、二〇〇一年。
- ・水野知昭「滅びゆく神々への哀歌―「巫女の予言」の語り の構造―」、『人文科学論集』信州大学文化コミュニケーション学科編、第35号、二〇〇五年。

## おつとめにおけるおうたと手振りの関係性

吉田 あゆみ

コメント

宗教学科教授 澤井義次

吉田さんが卒論研究に取り組んだのは、三回生の秋学期からであった。秋学期に入ってすぐ、講義が終わった後、少し相談を受けた。そのときのやりとりが、吉田さんがこの卒論テーマを選ぶきっかけになった。吉田さんは三回生の夏、自教会で月次祭に参拝していたとき、おつとめの手振りには、どのような意味があるのか、そのことがふと気になったという。それは天理教学研究において、大変重要な論点の気づきであったと言えるであろう。

「みかぐらうた」研究においては、これまでも数々の優れた著書や論文の蓄積がある。しかし、「みかぐらうた」のおうたが、その手振りと不可分に結びついていることに注目して、その手振りの意味を掘り下げて論じた教学研究はほとんどないに等しい。吉田さんは「みかぐらうた」研究に関する先行研究を丁寧に読んでいく中に、卒論の内容の方向性を次第に明確に

し、それと同時に、「みかぐらうた」のおうたとその手振りを意味論的に分析していった。

優れた卒業論文を作成するための秘訣は、まず、論文作成に十分な時間をかけることである。そのことは、だれもが分かっていることであるが、吉田さんはそのことを実行したと言えるであろう。後輩の学生のみなさんにも、そうした姿勢をぜひ見習ってほしいと思う。ほぼ一年余りをかけた研究の成果がこの優れた卒論である。まさに労作である。

本論文は、序と結論のほか、全体が三章構成になっている。簡潔にももな内容を概観してみたい。まず、第一章では、「みかぐらうた」のおうたとその手振りの関わりを論じている。おつとめにおいて、「理を振る」ことは、親神の守護の理を手振りに表現することを意味する。「理を振る」ことによって、親神の守護の理が開示されるが、こうした点に「理の歌」としての「みかぐらうた」の特質があるという。つまり、おつとめにおいて、「みかぐらうた」のおうたのエククリチュール性、おうたを口で唱えるパロール性、さらに教祖によって教示されたパフォーマンス性の三つの特徴が一つに重なって、「みかぐらうた」の意味世界を構成していると論じている。

次に第二章では、おうたとその手振りの関わりについて、特に「こゝろ」と「心得違い」の語とその手振りに焦点を絞って考察している。「こゝろ」に関連するおうたをその手振りとともに唱えるとき、親神の深い思いを体感あるいは実感できるように配慮されているという。さらに「こゝろえちがひはでなほ

しや」(六下り目・八ツ)のおうたとその手振りを考察するとき、それは自分のこれまでの通り方、心の使い方を反省することで、新しく心を入れ替え生まれ更わらせていただくという意味に理解できると論じている。

さらに第三章では、前二章における考察を踏まえて、理と手振りの関係性をいっそう深く明らかにしようとして試みている。「みかぐらうた」はおうただけではなく、手振りや足の動きを伴う踊りである。おつとめにおいて、「理を振る」とは、みずから「てをどり」を通して変化し、成人させていただくことにはかならない。つまり、心の勇みと成人がもたらされない「てをどり」は、形は美しく踊っていたとしても、その「てをどり」は「理を振る」という思召に叶っていないという。

最後に結論では、おうただけでは分かりにくい点は、手振りや足の動きによって、より分かりやすく教えられているという。「みかぐらうた」は口に唱え、身体で踊るところに、ほかの原典よりも身近に感じることができる。そのことによって、親神の守護が心とありありと感じとれるだけでなく、身体でも親神の守護の有難さを体解することができると述べている。

以上、吉田さんの卒論のおもな内容を記したが、「みかぐらうた」のおうたと手振りの関わりに関する具体的な分析叙述は大変説得力をもっている。ただ、議論の展開には、いまだ粗さや曖昧さが目立つが、それは「みかぐらうた」のおうたに込められた含蓄深い意味、あるいは意味の深みとも連関しているのかもしれない。ともあれ、吉田さんの卒論が、「みかぐらう

た」のおうたの意味をその手振りという、いわば「身体知」と関連づけて理解することの重要性を明らかにしたことは、今後の「みかぐらうた」研究において、大変貴重な示唆を与えていると言えるであろう。

## 序

現代の宗教学研究において、宗教を理解するうえで、これまでも儀礼的行為の重要性がしばしば論じられてきた。しかし、従来の宗教研論の多くは、キャサリン・ベルも論じているように、「宗教のより認知的な側面を強調する傾向」があった。ところが、特に一九九〇年代以後、宗教学の理論的枠組みが再検討されるようになり、宗教を理解するうえで、宗教の儀礼的行為の意義がそれまで以上に認識されるようになった。ベルも指摘しているように、「宗教の実際の『行ない』」が注目されて、宗教研の「パフォーマンス・アプローチ」が行なわれるようになったのである。こうしたアプローチは宗教の情動的、身体的、感覚的な側面をより評価しようとする現代の宗教研の動向を示している。このパフォーマンス・アプローチは、ベルが言うように、宗教研における「口述性と文字性を分ける文化的区分」を再検討するためにも用いられている。(1)

天理教における原典「みかぐらうた」は、言うまでもなく、教祖によって、おつとめの地歌として書き記された。また教祖は「みかぐらうた」の地歌とともに、その手振りも教えられた。おつとめにおいて、おうたを口で唱えるばかりでなく、手を振らせていた中にも、心はおのずと勇んでくる。たとえ子どもであっても、だれもが「みかぐらうた」をとおして、その人なりに親神の思いを理解することができるとして、「みかぐらうた」のおうたは口に唱えるとともに、手を振らせていた。だくことによつて、その言葉と意味の深みが次第に心に浸み込んでくる。心に感じとらせていただくことができる。つまり、天理教の信仰において、エクリチュールとしての「みかぐらうた」は、ただ単に「書かれた聖典」であるばかりではなく、まさにパロールの言葉すなわち「語られる聖典」でもある。(2)

おつとめを勤めさせていたとき、私たちは覚えているおうたを口で唱えさせていた。ともに、教祖によつて教えられた手振りを振らせていただく。おつとめのおうたと手振りは、口述性と文字性の両方を併せ持っているばかりでなく、身体性を伴うところにその特徴があると言えるであろう。ここでは、まず、おつとめの手振りについて、卒業論文の研究テーマとして取り上げようと思つた経緯を少し記しておきたい。昨年の夏、帰省して自教会で、月次祭に参拝させていた。ふと気になることがあった。それは、おつとめの手振りには、どのような意味があるのかというこ

とであった。その折、特に気になったところは、

やつぱりしんぐせにやならん  
こころえちがひはでなほしや (六下り目八ツ)

という、六下り目八ツのおうたであった。このおうたに出てくる「でなほしや」という言葉の意味とその手振りの意味には違いがあるのでは、とふと思つた。

「でなほし」(出直し)という言葉は、今日、教内では一般的に、死を意味している。しかし、「みかぐらうた」のこの箇所における「でなほし」の手振りは、勇みの手すなわち「ひのきしん」の手振りである。この道の教えでは、ひのきしんは親神への神恩感謝の心を日々の実践に移すことであるから、当然、それは陽気な明るい意味あいを含んでいる。ところが一方、「でなほし」は死を連想させることから、悲しく暗い意味あいを持つてしまう。私はここに言葉の意味とその手振りの意味には、何となく違和感を覚えた。

そのときまでは、それほど深く、おつとめの手振りの意味に注目していなかった。ところが、そのおうたの意味内容がきっかけとなって、「みかぐらうた」のおうたとその手振りの関わりに関心を抱くようになった。天理教学に関する先行研究を読むなど、おつとめの手振りに注目するようになって、おつとめにおける手振りと言語には、密接な関係性が存在することが次第に分かってきた。そのことに気づいてからは、お

つとめにおけるおうたとその手振りが含意する意味の一つひとつに関心を抱くようになった。

こうした問題意識から、卒業論文では、おつとめにおけるおうたと手振りの関係性、あるいは、手振りに込められた意味について考察したい。まず、第一章においては、「みかぐらうた」のおうたとその手振りの関わりについて考察したい。そのためにも、まずは、「みかぐらうた」がどのようなものかあるか、また、手振りの種類にはどのようなものがあるのかを考察し、そのうえで、おうたとその手振りの関わりについて理解を深めたい。次に第二章では、「みかぐらうた」のおうたの中でも、特に「こゝろ」とその手振り、さらに「心得違い」とその手振りに焦点を絞って、おうたと手振りの関わりについて考察を進めたいと思う。さらに第三章では、それまでの前二章における考察を踏まえて、理と手振りの関係性について考察していきたい。おつとめにおいては、「みかぐらうた」のおうたを口に唱え、また手を振らせていただく。おつとめにおける手振りの意味について、天理教の信仰において、「みかぐらうた」が日々の具体的な信仰の指針になっていることと重ね合わせて理解するとき、手振りに込められた意味をなおいっそう深く理解させていただくことができるし、また「みかぐらうた」のおうたの意味も、より身近に感じとらせていただくことができるであろう。教祖はおつとめにおいて、手を振らせていただくことを、「理を振る」と諭されたが、教祖のこのお言葉に込められた意味について、卒業論文の研

究をとおして、掘り下げて理解することができれば、と思っている。

## 第一章 「みかぐらうた」のおうたと手振りの関わり

まず、ここでは、「みかぐらうた」のおうたとその手振りの関わりについて考察したい。そのためにも、「みかぐらうた」とはどのようなものであるかを確認するとともに、おつとめにおける手振りの種類には、どのようなものがあるのかについて把握しておきたい。そうした点を確認したうえで、おつとめにおいて、「みかぐらうた」のおうた、そのおうたを口で唱えること、さらにその手振りがどのような関わりにあるのかを考察したい。

### 第一節 「みかぐらうた」とその構成

深谷忠政は、「みかぐらうた」を、天理教の信仰者にとつて、日々、心に銘記して忘れることのできないものである(3)と述べている。ここでは、まず、本論文における予備的考察として、「みかぐらうた」とはどういうものであるのかについて考察しておきたい。「みかぐらうた」は教祖から教えていただいたものであり、「かぐらとてをどりの地歌を合わせた、つとめの地歌」である。(4)それは教祖によって作詩編成されたものである。その真筆原本は今日、いまだ発見されていない。

「みかぐらうた」は「あしきをはらうてたすけたまへ てんりわうのみこと」という第一節から始まり、「ちよいとはなしかみのいふこときいてくれ あしきのことはいはんでなこのよのぢいとてんとをかたどりて ふうふをこしらへきたるでな これハこのよのはじめだし」の第二節、「あしきをはらうてたすけせきこむ いちれつすましてかんろだい」の第三節と続く。また第四節は「よろづよ八首」、第五節は「十二下り目」から「十二下り目」までの「十二下りのおうた」から成り立っている。第一節から第三節までを「かぐら」のおうたと呼ばれ、第四節と第五節は「てをどり」のおうたと呼ばれている。

それぞれのおうたは、第一節から順番に教えられたものではない。教祖は慶応二年、まずはじめに第一節を、同三年の正月から八月にかけて第五節を教えられた。明治三年に第二節を教えられ、第四節を第五節の前に加えられた。同八年には、第三節を教えられた。そして同十五年に、第三節の「いちれつすますかんろだい」を「いちれつすましてかんろだい」に、「あしきはらひたすけたまへ」と教えられていた箇所を「あしきをはらうてたすけたまへ」と改められた。このとき、おうたは改められたが、手振りはそのままの形で改められることはなかった。

## 第二節 「理の歌」としての「みかぐらうた」

手振り（おてふり）とは、つとめの地歌である「みかぐら

うた」を口に唱えながら、手足で表現するものである。教祖は「みかぐらうた」の節付けと振付けに、満三ヶ年を費やされたという。節と振付けの経緯は、『稿本天理教祖伝逸話篇』の「18 理の歌」において、次のように記されている。

十二下りのお歌が出来た時に、教祖は、

「これが、つとめの歌や。どんな節を付けたらよいか、皆めいめいに、思うように歌うてみよ。」

と、仰せられた。そこで、皆の者が、めいめいに歌うたところ、それを聞いておられた教祖は、

「皆、歌うてくれたが、そういうふうに歌うのではない。こういうふうに歌うのや。」

と、みずから声を張り上げて、お歌い下された。次に、

「この歌は、理の歌やから、理に合わして踊るのや。どいうふうに踊ったらよいか、皆めいめいに、よいと思いうように踊ってみよ。」

と、仰せられた。そこで、皆の者が、それぞれに工夫して踊ったところ、教祖は、それを「らんになつていたが、

「皆、踊ってくれたが、誰も理に合うように踊った者はない。こういうふうに踊るのや。ただ踊るのではない。

理を振るのや。」

と、仰せられ、みずから立つて手振りをして、皆の者に見せてお教え下された。(5)

「みかぐらうた」は「理の歌」であり、教祖は「理に合して踊る」、また「理を振る」ことの大切さを教えられた。その場に居合わせた人びとが教祖に促されて、各自がそれぞれ工夫して踊ってみたが、人びとの中で「理に合うように」踊った者はなかった。ここで教祖が「ただ踊るのではない。理を振るのや。」と言われたが、このお言葉は手振りのもつ深い意味あいを示唆している。「みかぐらうた」において、「理を振る」ことは親神の守護の理を手振りに表現することを意味する。「理を振る」ことによって、親神の守護の理が開示されるのであり、こうした点に「理の歌」としての「みかぐらうた」の特質がある。この「理の歌」については、第三章で詳しく考察することにした。

### 第三節 手振りとその動作

教祖は、最初は一応、皆の者に手を振るように教示された。そのうえで、教祖みずからが手本を示して、「おてふり」を教えられた。それは「みかぐらうた」を口で唱えながら、足の動きを伴いながら手振りをするものである。

教祖によって教えられた手振りの基本的な動作には、次のようなものがある。その動作のパターンを挙げておく。

合掌の手…両平手の掌を向い合わせに軽くつけて、胸の前 に立てる。

おさえの手…両平手の掌を下向にして、腹の前辺で平に揃える。

ふりの手…両平手の掌を向い合わせにして左右にふる。  
なげの手…両平手の掌を向い合わせにして斜右前下、又は斜左前下に投げる。

たてなげの手…両平手の掌を向い合わせにして斜右前上、又は斜左前上に投げる。

いさみの手…先ず、右平手は掌を下向に、左平手は掌を上向にして肩の高さまで上げ、次にその両平手を腹の脇前まで下げながら掌を返して前の反対にして再び肩の高さまで上げる。

廻りの手…左平手で右袂を軽く押え、右平手は掌を外向にして左頬の斜前下辺に上げる。

ひのきしんの手…両平手を軽く握り、右拳は右肩に上げ左拳は左腰の脇に垂れ、左右の拳を上下反対に動かす。

合掌の扇の手…両扇を向い合わせに軽くつけて胸の前に立てる。

おさえの扇の手…両扇をもつ手の甲を上向にし右扇を上、その端を三分の一ほど重ねて腹の前辺で平に揃える。  
廻り扇の手…左扇で右袂を軽く押え右扇は掌の方を外向にして、左頬の斜前下辺に上げる。

立て扇…両平手の掌を内向に両扇を立て、その端を三分の一ほど右を内側にして重ねる。(6)

以上、基本的な動作としては、一二種類を数えるが、それらは「みかぐらうた」のお歌と結びついて、親神の守護を表出する「みかぐらうた」の世界を構成している。「みかぐらう

た」のおうたの意味は、おうたを口で唱えるとともに、教祖によって教えられた上述の手振りを振らせていただくことによつて、心底から感じとらせていただくことができるように配慮されている。つまり、おつとめにおいて、「みかぐらうた」のおうたのエクリチュール性、おうたを口で唱えるパロール性、さらに教祖によつて教示されたパフォーマンス性の三つの特徴が一つに重なつて、「みかぐらうた」の意味世界を構成していると言えるであろう。おつとめを勤めさせていた中、この道の信仰者が「みかぐらうた」のおうたに込められた親神の思いを深く理解できるようになつていくのである。

## 第二章 「みかぐらうた」における「こころ」とその

### 手振り

ここでは、第一章における考察を踏まえて、「みかぐらうた」のおうたとその手振りの関わりについて、掘り下げた考察をおこなうために、この道の信仰における重要な語の一つ、すなわち「こころ」の語に注目したい。「みかぐらうた」のおうたの中では、繰り返し「こころ」の語が出てくるが、本章では、特に「こころ」とその手振り、さらに「心得違い」とその手振りに焦点を絞つて、おつとめにおけるおうたと手振りの関わりについて考察することにした。

### 第一節 「みかぐらうた」における「こころ」とその手振り

天理教の教えによれば、私たち人間の身体は、親神から借りているものである。親神の側から言えば、人間に貸しているものである。この教えは「かしもの・かりもの」の理と言われる。私たちは自分の身体は自分のものであるかのように思っているが、親神から「かりもの」であつて、自分勝手に使うことはできないものである。この点については、「おさしづ」に、

人間というは、身の内神のかしもの・かりもの、心一つが我が理。(明治三二・六・一)

人間というものは、身はかりもの、心一つが我がのもの。たった一つの心より、どんな理も日々出る。

(明治三二・二・一四)

と論されている。このように、心だけは自分のものとして自由に使うことができるように守護されている。

このように、この道の信仰では、とりわけ、「心」の重要性が強調されている。そこで、手振りに込められた意味を深く理解するために、その糸口として、「みかぐらうた」に出てくる「こころ(こころ)」の手振りに焦点を絞つて考察してみた。その手振りは計二四回、つぎの箇所に見られる。

それらのうち、一七箇所では、右平手を胸にとり、右平手

をそのまま左平手を胸にとる動作である。

- よろづよ 八首 せかいのこゝろもいさめかけ  
一下り目 三二 さんざいこゝろをさだめ  
三下り目 六ツ ひとすぢごゝろになりてこい  
四下り目 八ツ こゝろハだんくいさみくる  
五下り目 三ツ こゝろのよこれであらひきる  
五下り目 六ツ むごいこゝろをうちわすれ  
五下り目 六ツ やさしきこゝろになりてこい  
六下り目 一ツ ひとのこゝろといふものハ  
七下り目 二ツ ふかいこゝろがあるなれば  
八下り目 四ツ よくのこゝろをうちわすれ  
八下り目 四ツ とくとこゝろをさだめかけ  
八下り目 七ツ なにかこゝろがすんだなら  
九下り目 二ツ かみのこゝろにもたれつけ  
九下り目 六ツ こゝろさだめのつくまでハ  
十下り目 一ツ ひとのこゝろといふものハ  
十下り目 四ツ こゝろすみきれごくらくや  
十一下り目 六ツ こゝろあるならたれなりと

さらに、「両平手を同時に胸にとる動作は、次の5箇所に見られる。

- 二下り目 九ツ こゝろをさだめぬやうなら  
七下り目 三ツ みなせかいのこゝろにハ

九下り目 三ツ みればせかいのこゝろにハ  
十下り目 七ツ なんぎするのこゝろから  
十下り目 十ド やまひのもとハこゝろから  
右扇を胸にとり、右扇そのまま左扇を胸にとる動作は、四下り目に2回出てくる。

- 四下り目 二ツ ふたりのこゝろをさめいよ  
四下り目 六ツ なれどこゝろがわからないで

また「こゝろえ」も二箇所に出ている。それは右平手を胸にとり、右平手そのまま左平手を胸にとる動作である。

- 六下り目 七ツ こゝろえちがひはならんぞへ  
六下り目 八ツ こゝろえちがひはでなほしや(7)

このように、「こゝろ(こゝろ)」という言葉の手振りを見ただけでも、以上の三種類が見られる。

### 第二節 「こゝろ」の語とその手振りの意味

ここで挙げたおうたに出てきている「こゝろ」の語とその手振りに込められた意味に焦点を絞って考察してみたい。まず、「みかぐらうた」における「こゝろ」の意味について考察しよう。

五下り目 三ツ こゝろのよこれをあらひきる  
このおうたにもあるように、心の汚れはむしい心、疑う心、

よくの心、ほこりの心のような心の遣い方をすると、その心は親神の思いに沿わない心の遣い方であり、私たち本来の陽気ぐらしの生き方から遠ざかっていく。一方、そうした心遣いと反対の心遣いは、優しい心、穏やかな心、奇麗な心、素直な心などである。この点については、

五下り目 六ツ むごいこころをうちわすれ やさしき  
こころになりてこい

と教えられる。このおうたにあるように、心に悪影響を及ぼす心の遣い方をやめると、自然と優しい心、素直な心になってくる。心の汚れ、心のほこりを払うのは簡単なことではなく、私たち人間には難しいものである。しかし、そのような中でも、親神は私たちを救ってくださるのである。

これらのおうたに伴う手振りに注目するとき、「こころのよごれをあらひきる」という手振りは、「心の汚れを洗い切る」、つまり、人間の心に溜まった心のほこりを洗い切るという動作をする。このことは、人間思索の心を払うことによって、人間が本来的にもっている澄んだ心にしてくださることを具体的に教示されている。さらに「むごいこころをうちわすれ」という手振りは、「酷い心を打ち忘れる」、つまり、両手で押さえつける手振りから、あたかも強い者が弱い者を押さえつけるような自己中心的な心をすっきりと払うことを教示されていると言えるであろう。さらに「酷い心を打ち忘れる」ことによつて、「やさしきこころになりてこい」と教え

られる。この手振りは、手を平らにして円を描き、両側から抱きかかえて押しただく動作である。この動作から、「優しい心」とは人を抱きかかえるような思いやりのある心を示している。

ここに挙げた「こころ」に関連する一連のおうたを読ませていただくだけでも、私たちは「みかぐらうた」におけるおうたとその意味を唱えさせていただくだけで、親神の思いをよく理解させていただくことができるが、さらに、その意味の理解が手振りを伴うことによつて、なお一層、手振りをとおしても、親神の深い思いを体感あるいは実感させていたいただくことができると言えるであろう。

このことと同様のことは、心を澄み切る・澄ます、心を洗い切るという手振りについても言えるであろう。まず、心を澄み切る・澄ますは、心に欲があると心が欲で曇り濁る。この欲は泥と同じであり、出してしまわぬかぎり水、つまり心を濁らすことになる。そこで欲の泥を出したら、心は澄みきるのである。次に心を洗い切るは、洗い切れれば澄み切るのであつて、洗うことの徹底である。このように比べてみると、言葉こそ違つているが、その意味は同じであると理解することができるといえる。つまり、心の掃除が最も肝心なのである。こうしたおうたの意味理解は、手振りによる動作によつて、いっそう強いものとして、心に体感することができる。

さらに、親神の心にもたれる「こころ」になることの意味とその手振りについて考察するとき、私たちは親神の親心をあ

りありと感じ取ることができない。「みかぐらうた」の九下り目において、次のように教えられる。

九下り目 二ツ ふじゆうなきやうにしてやらう かみ  
のころにもたれつけ

「ふじゆう」は手足ともに、五下り目七ツの「なんでもなんぎハさゝぬぞへ」と同じ動作であつて、「なんぎ」は、身体を斜左向にすると共に、手振りは一ツ下り目七ツの「なんじふをすくひあぐれば」と同じである。「なんじふを」は、両平手は掌を内向にして、大方袖口に入れ、指先で袖口を軽く握り、左を前にして両袖先を重ね合して鳩尾のあたりに軽く当てると共に、上半身は少し下向気味となる。足は、腰を浮かすようにしながら、右左と二歩進み、右を揃える。(8)

「もたれつけ」については、両平手は大方袖口に入れて、「ふじゆう」と同じ要領で、鳩尾のところで重ね合わすと共に、上半身は後に反り気味となる。足は、右左と二歩退り、右を揃え、左を踏む。(9)

「ふじゆう」と「もたれつけ」は一見、同じ手振りのように見えるかもしれないが、身体の動きが異なっている。「ふじゆう」の手振りは、「ふじゆう」のあり方が人間思案の心によって難儀不自由な生き方をしていることを示唆しているが、一方、「もたれつけ」の手振りは、私たちが親神に凭れ切つて通らせていただくことによつて、どのような難儀不自由な道中であつても、親神は私たちをたすけていただくことを含意し

ている。つまり、「みかぐらうた」のおうたが教示しているように、親神の心に凭れ切つて、日々、心勇んで通らせていただくところに、難儀不自由のないようにお導きくださるのである。

このように、「みかぐらうた」のおうたを唱えさせていただき、そのおうたに込められた意味を分らせていただくことができ、親神の思いをより深く理解させていただくことができる。さらに、おうたに伴う手振りの分析をおして、そのことをなお一層、心底から感じとらせていただくことができる。

### 第三節 心得違いについて

前節における考察を踏まえて、本節では、親神の思いに沿わない心遣い、すなわち、心得違いに焦点を当てながら、おうたに伴う手振りの意味あいについて考察することにした。『みかぐらうた』の六下り目において、次のように教えられる。

六下り目 八ツ ころろえちがひはでなほしや

まず、「でなほしや」という言葉に注目したい。「でなほしや」は文字通り、「出直しや」である。出直しとは一般的に言えば、最初からもう一度やりなおすこと(10)を意味している。『天理教教典』には、「身上を返すことを、出直と仰せられる。」(11)と記されている。「おふでさき」には、「出直し」の用例は見られないが、前述した「みかぐらうた」のおうた、

すなわち六下り目にだけ出てくる。「おさしづ」には、次の箇所に見られる。

さあ小人どれ出直しであろう、誰出直しであろう、日々思うであろう。事情は二つ一つの理である。又々事情、三年先という。三才事情計り掛ける。いつく出直し・・・(明治三三・一一・二)

さあ小人というは、どうも出直し餘儀無く事情々々、一時どうも心がどうも判然せん(明治三二・八・二補)

生まれ替わり出直しても、一つもほどかずしては、どんならん。(明治二二・一・二八補)

それぞれ心だけの理を遺して出直して居るから、そこは心置き無う運んでくれるよう。(明治二六・一〇・二三)

前節でも論じたように、私たち人間の身体は親神からお借りしている「かりもの」であって、期限が来て、この身体をお返しすることが死であり、出直しである。教祖は人間の死というものは古い着物を脱いで、また新しい着物を着て出直してくるようなものだと言えられた。つまり、私たちの身体は親神から借りたものであるから、年限が来れば、親神に返さなければならぬのである。ただ、身体を親神にお返しし

ても、ちやうど古い着物を脱いで、新しい着物と着かえるように、魂は新たに私たちの心遣いにあつた身体を親神から借りて、この世へと生まれかわってくる。出直しの意味あいについては、元初まりの話において、出直す度に五分ずつ成人したと教えられているように、出直しの過程を通して、来生では、今生よりも成人したがたへと引き出してくださいるのである。

ところで、この身上を親神にお返しすることなく、生きながらにして出直す、心が出直し、すなわち、心の生まれかわりをさせていただくのが、この道の教えにおけるたすけである。身上の出直しが「かしの」としての私たちの身体を親神にお返しするのに対して、心が出直しとは、身上かしのを返すことなく、親神の思いに沿った神一条の心へと生まれかわることを意味する。

次に先人たちが「ころえちがひはでなほしや」をどのよう理解しているのかについて考察したい。まず、深谷忠政は「心得違ひは出直しやであります」と確認したうえで、次のように言う。

近道や欲や高慢のため、お道より遠ざかりお道の正しい信仰を踏み間違えた者は、終には身上をおかえしせねばならぬという意味であります。(12)

また、平野知一によれば、

今日までの心得違いをさんげして、今後は親神様の御教を守って通らせて頂くと心を定めても、何時の間にやら心が後戻りして、自分の持ち前性分、悪いんねんの心に負けて道を誤り、行きつ戻りつ一進一退の歩みをするような事もあるのであります。しかしたとえ失敗しても諦める必要は無いのであります。改めて自己を反省し、更に決心を新たに努力を続けて行くところに、一步一步と心の成人をさせて頂くのであると思います。

長年信仰して居ても、自己反省を怠り、心得違いを繰り返して居るだけでは、遂に親神様に身上をお返しせねばならぬようになるであります。(13)

さらに榊井孝四郎は、次のように言う。

親の代からこの道信心をさしてもらってきた、引き続いて今日もやっぱり信心さしてもらわねばならん。天理に適わぬ心得違いでは、身上を返さなきゃならんのである。長らく道を信心して通らしてもらってきたが、今日の心得違いではなんにもならん。

月日抱き合わせの天理の世界に出していただいて、天理が分からないで、月日のご守護を貸してくだされているのも分からないで、通っておるようなことでは、天理の世界においていただくことはできないのである。天理の世界においていただければ、身上出直しさしていたくよりほかにない。この世の中は「天」という、天の理のかからんとこ

ろはない」と仰せくだされている。天理の網の中にある人間である。この網を破ったならば、天理の世界の外に出るよりほかはない。身上出直しさしていたくよりほかにないのであります。(14)

以上、論じたように、深谷、平野、榊井の各氏による「みかぐらうた」のおうたに関する理解では、「出直し」とは私たちの身体を親神にお返しすることとして解釈されている。それに対して、上田嘉成は次のように言う。

「出直しや」とは、心得違いに気付いたら、直ちに信仰の出発点に立ち返って信仰の本道を歩み直すように、との仰せであります。このように、場合によっては身上をお返しして出直さなければならぬこともあるのであります。親神様のたすけ一条の御親心からすれば、身上返還の出直しは酷いようではあります。欲に誤り、高慢に増長した救い難い心得違いに対しては、身上出直しも真にやむを得ざるに出でた親神様のお慈悲として、なるほどと納得されるのであります。我々は、そのような最悪の事例もあるということをよく承知して、間違いに陥らぬよう常に自らの心を反省し、改良して、教祖のひながたに照らし、誠実の道に照らして、常に常に入信元一日の日に戻って、純真なうぶな信仰を生涯末代続けさせて頂きましょう。(15)

さらに『みかぐらうた略註』では、上田嘉成は六下り目八

ツについて、

誤った心がけで信心してきた者は、もう一度振り出しへ戻って、元一日の心になって、第一歩から正しい信仰の道に進んで来い。(16)

と注記し、「こゝろえちがひはでなほしや」を「もう一度振り出しへ戻って、元一日の心になって、第一歩から正しい信仰の道に進む」ことと解釈している。

天理教道友社編『みかぐらうたの世界をたずねて』では、先人が理解してきた「身上を返す」という意味理解とともに、このおうたが「改めてやり直す」という意味にも解釈することができると紹介している。(17)

さらに山本正義と辻井正和は、「こゝろえちがひはでなほしや」について、前述した上田と同じ意味に理解している。まず、山本の意味理解は次のとおりである。

「こゝろえちがひはでなほしや」の手振りの勇んで戻る表現に、親神、教祖の温かい親心の教導を痛切に感じます。「でなほしや」のお歌を、生命を失うこととの解釈もありますが、ここでは、一般用語としての「最初から改めてやり直す」意味の「出直し」と解するがよいと思います。手振りからみてもその方が自然と存じます。「心得違い」は誤りを自覚して「再出発する」ことに意義が生まれるのです。改めるにやぶさかであってはなりません。(18)

また、辻井正和は次のように言う。

ここで八ツの「でなほしや」を見てみると、これはその直前に「やつぱりしんぐせにやならん」と歌われている。それを受けて「でなほしや」と歌われる。七ツで「こゝろえちがひはならんぞへ」と歌われながらも、八ツでは信心を続けるように神様の方から語り掛けて下さっているように感じられる。それを受けて「こゝろえちがひはでなほしや」と歌われているのである。(19)

さらに辻井も指摘しているように、続く九ツは、「こゝまでしんぐせからハ」となっている。心得違いをしても、やり直しながら信心を続けるところに、「こゝまで」という状況に至る。「でなほし」が死を意味するのであれば、「こゝまで」来ることができなくなってしまう。

こうした文脈から手振りに込められた意味も考慮して、おうたの意味を考察するとき、このおうたの意味としては、「改めてやり直す」という意味理解が適切であると考えられる。「ならんぞへ」と厳しく言われながらも、「でなほしや」と改めてやり直すように促され、「こゝまで」と言われるところに、親心を感じるのである。

このように「こゝろえちがひはでなほしや」に関する山本と辻井の意味理解は、「みかぐらうた」のおうたの意味を理解するうえで、その手振りに込められた意味を考慮していると考えるであろう。

ところで、「こゝろえちがひはでなほしや」(六下り目 八ツ)の意味をめぐって、安藤は次の文章に見られるように、私たち人間の心のほこりを払うことが肝心であることを強調している。

親神様は人間に陽気ぐらしをさせたいとの思召にて表に現れて(教祖の身体を貰い受け、教祖の口をもつて物語りされたこと)この世の中のありとあらゆる元の理を説き明かされ、人間の生存中の難儀不自由は、魂を掃除せぬところより発生することを分明され、魂の掃除をせねばたすかる道はないと仰せられたのである。

心さいしんぢつ神がうけとれば

どんなほこりもそふぢするなり (一三号 一三)

と仰せられてあるごとく、親神様は人間の心の掃除をお待ちかね下されて、これが神のぞみと仰せられているのである。(20)

つまり、心のほこりを払うことによって、「魂の掃除」をすることができるのである。このことを安藤は強調するが、安藤のこうした解釈の前提には、上田、山本、辻井が解釈しているように、信仰生活において、もう一度振り出しへ戻って、元一日の心になって、第一歩から信仰をさせていただくという理解が存在していると言えるであろう。

以上、考察してきたように、「こゝろえちがひはでなほしや」

とは、親神の思召に沿わない心遣いをしていると、私たちは出直してしまう、すなわち、死んでしまうと考えられてきたきらいがある。しかし、これまでの先人たちのおうたの意味理解を考察していくと、出直すこと、すなわち死ぬことを意味しているだけではなく、自分のこれまでの通り方、心の使い方を見直し、反省することで、新しく心を入れ替え生まれかわることを意味していると考えるであろう。したがって、親神の思召に沿うように、成人させていただくことが肝心であることが明らかになる。

また、出直すこと、すなわち死ぬことは、言うまでもなく、悲しく辛いことではあるが、「かりもの」である身体を自分のものだと思うから、自分が無くなってしまうようで辛いのである。しかし、このおうた「こゝろえちがひはでなほしや」に込められた意味を考察するとき、自分自身の思いにしたがって使うことができるのは心だけであるので、どこまでも親神の思いに沿った心の遣い方を心がけることが肝心であることが明らかになる。

### 第三章 理と手振りの関係性

本章では、これまでの前二章における考察を踏まえて、おつとめにおける理と手振りの関係性について考察したい。教祖は「この歌は、理の歌やから、理に合わして踊るのや。」と

教示されたと言われるが、そのことがどのようなことを意味していたのかについて検討したい。

### 第一節 「これは、理の歌や」——理とその意味——

お道の教えの中で「理」という言葉は、独自の意味をもつて使われている。その第一義は、深谷善和によれば、親神が深く厚い親心をもつて、この世のすべてを導き治められる「守護の姿」、人間の歩むべき道も含めた世界の根本原理、存在の理法、親神の摂理という意味である。(21) それでは、「理」とは何かと言えば、

道は假名な一つ理が道、理が神である。(明治三三・一一・一二)

という「おさしづ」に見られるように、「理」とは深谷忠政が言うように「親神の自己限定」である。親神は「理」を通じて働かれるのであって、「理」とは親神のご守護のあらわれ方である。(22)

「おふでさき」の中にも、「理」という言葉が出てくるおうたが一首ある。

このよふハリいでせめたるせかいなり

なにかよろづを歌のりでせめ (二号 一一)

このおうたの中には「理」は二回出てくる。(23) この世

界は親神の心を基盤として、天理によって成立している世界である。したがって、私たち人間の行為はもとより、すべての理は、歌によって説き諭される。この世界は「理せめの世界」であり、すべてにわたって親神が守護されている世界である。このおうたの中で、「理でせめる」とは、澤井義次によれば、親神の働きによって治めていることであり、「理」とは親神の働きの筋道を意味する。親神の働きの筋道としての「理」は、親神の働き、人間の心、親神の働きの結果として現れる事物事象のあいだの連関性を示している。(24)

「みかぐらうた」はお言葉通り、「理の歌」である。したがって、理に合わせて踊るのであり、理を振る大切なつとめの地歌である。また「みかぐらうた」におけるおうたはすべて、親神のたすけ一条の思召を表現している。したがって、手振りや大切に考え、地方によく合わせて、正しく振るように心掛けることが肝心である。手振りにしても鳴物にしても、要は一つの理、親神の理に心を合わせることが大切である。そのためには、つねに我の心を払い去るよう、常日頃から努力することが肝心である。自分の思うように心を遣ってはいは、一つの理、すなわち親神の理、親の理に心を合わせることはできないであろう。

『稿本天理教祖伝』にも『稿本天理教祖伝逸話篇』にも記されているように、教祖はこの道の先人たちに、これは、理の歌や。理に合わせて踊るのやで。ただ踊るのではない。理を振るのや。と諭された。(25)

この論しにおける「理の歌」とは、鳴り物を伴った音律で奏でられながら歌われるものであり、「理に合わせて踊るのやで」、「理を振るのや」とは、教祖によりつけられた手振り、足の動きを伴う踊りのことである。

つとめは、鳴物を伴う歌（聴覚的要素）と、手振り、足の動きを伴う踊り（視覚的要素）という二つの要素に区分できる。聴覚的及び視覚的な要素を併せて考える処に、「理」の具体的、直接的な意味が浮き上がってくる。（26）

## 第二節 「りをふく」―理とその手振り―

ここでは、理とその手振りの意味を踏み込んで明らかにするために、この「りをふく」から「理」について考察していきたい。「みかぐらうた」のおうたの中で、「理」という言葉が見られるのは、次の一ヶ所だけである。

一下り目 五ツ りをふく

まず、「りをふく」の手振りは、円を描きながらさがる手振りである。そして同時に、平に円を描く手は次の箇所にも見られる。

三下り目 十ド このたびあらはれた  
十下り目 十ド このたびあらはれた  
五下り目 九ツ こゝはこのよのものちば  
七下り目 八ツ まいたるたねハみなはへる

この「りをふく」において、諸井慶一郎によれば、「円を描きながらさがるのは、田地に降った雨水を引き込む感じの手である」。(27) また、「あらわれ」の意味であり、「元のちば」、「まいたるたねはみなはえる」のように、目を吹き伸び出る意味での、理を吹くに当てられている。さらに、この点について、諸井慶一郎は言う。

りをふくのふくは芽吹くだろうが、りは利か理か迷うところであるが、りやくあらわすこれをみてくれ（十三・二）とある如く、利益の姿を芽吹くだが、口伝に五という数の意味合いとして、五ツりをふくで日の五日はりをふくやと言われ、五とりとに深い関わりがある。それはなにかと思案するに、五分五分の成人を仰せられ、五分五分の一寸が一寸で目につきはじめに対し、五分は目に見へぬ。五分五分とはそのように、目に見へぬようだが着実に目に見へるようになるのが、生長のあるべき天然の姿で、それをもたらずのが、水気ぬくみ五分五分の月日のご守護の理、五分五分の理のたまもので、五分から五分の芽を吹くとゆう意味で、理をふくと言われるのだ、と自分は思っている。(28)

つまり、諸井が論じているように、「理をふく」という表現は、「親神の水気ぬくみ五分五分の月日のご守護の理」を表すお言葉である。

次に平らに円を描く手振りを考察したい。

三下り目 十ド このたびあらはれた

じつのかみにはさうあない

「あらはれた」については、諸井慶一郎によれば、「神・心はものと違つて元来目に見へぬ。これを理という。その理の实在のしるしが事に、見へる事に現れて出る。それを平に円を描く手振りで表され、それが円になるのは、一ちよの手の引き締めりも以てである」。さらに、「これを扇の手では、つとめばしよハ で左右の赤丸、つまり月日の理が浮き上がる形で現れ出る姿を鮮やかにおつけ下されている」。(29)

十下り目 十ド このたびあらはれた

やまひのもとハこころから

「神のかしもの心にかりもので、かしものかりものの理の元は神様と人の心とである。この理が現れ実証されることがかしものかりものの理に拠つて立つ、生涯の理を聞き分け、生涯の心を定めるためにならぬ」。(30)

この二つのおうたには、どちらも同じ「このたびあらはれた」という言葉がある。深谷忠政によれば、三下り目十ドの意味は天保九年十月二十六日のことで、この日は天理教の立教の日でもある。紋型ないところより、ない人間ない世界を創造された元の神が、旬刻限の到来とともに、教祖を月日のやしろとして、この世の表に現われ出られたという意味である。(31)

十下り目は、いよいよこの度、世界だめの教えによつて、いままで解からなかったことが、表明されるようになったという意味である。(32) どちらも同じ日のことを言われているように思われる。

次に、

五下り目 九ツ こゝはこのよのものとぢば

めづらしところがあらはれた

である。深谷忠政によれば、この「ぢば」は庄屋敷村の中山家のお屋敷(元のやしき)のことを指して、この世の元初まりにおいて、人間を宿しこまれた元のぢばのあるところであることを意味する。(33)

最後に、

七下り目 八ツ やしきハかみのでんぢやで

まいたるたねハみなはへる

である。深谷忠政によれば、このおうたはお屋敷に播く種すなわちお屋敷に尽し運ぶひのきしんの理は、一粒万倍となり、不思議な自由自在の親神のご守護として皆現われてくるという意味である。(34)

このように、同じ円を描く手振りでも、それぞれ異なった意味をもっていることが明らかになる。

### 第三節 理と手振りの関係性

前述したように、「みかぐらうた」の手振りは、教祖がみずから教えてくださったものである。教祖がみずから手本を示されたということは、こうあるべきだという「動き」を示されたことを示唆している。したがって、「理を振る」ことによつて、教祖が教えてくださった「動き」を形ばかり実践するばかりではなく、心から教祖の思いに沿わせていただくことが肝心であろう。

しかし、私たちは一人ひとり、年齢も性格も同じではない。教祖は人類の親として時代を超えた存在である。それは教祖の五十年にわたるひながたの道で実証されている。

これまでどんな事も言葉に述べた處が忘れる。忘れるからふでさきに知らし置いた。(明治二七・八・二八)

と言われている「おふでさき」とは違つて、「みかぐらうた」はおうただけではなく、手振りや足の動きを伴う踊りである。「おふでさき」は、たとえ人が読まなくても書き物として存在するが、「てをどり」は、誰かが実際に踊らなければ存在しない。親神から人間に対して備忘の啓示として、教理の体系が示された一七一一首の「おふでさき」は、いつでも誰でも誰でもが、読めるわけではない。特に官憲の弾圧が厳しかった時代においてはそうであった。しかし「てをどり」は、たとえ文字が読めなくても、いかなる時代条件においても、いつでもどこでも踊れるのである。

その身体の動きをとおして、教祖によつて教示された手振

りを振らせていただくことは、教祖の「ひながたの道」を、いわば追体験しようということにほかならない。したがつて、「みかぐらうた」における「かぐらづとめ」と、十二下りの「てをどり」は、教祖の動きをそのまま反復する手振りであり、さらに「ひながたの道」そのものの根源であると言えるであろう。

さらに注目すべき点は、振り付けの際に、教祖が「よいと思つたように踊つてみよ」と言われたという点である。教祖はまず、私たち人間に思い思いに踊らせてから、だれも理に合うように踊つたものはいないと仰せになり、その後、教祖がみずから教えてくださった。

教祖みずから踊ることによつて、「てをどり」の「形」が誕生した。その教祖が踊られた「形」である動きを私たちはなぞつていふという意味で、「てをどり」は「ひながたの道」を歩むもつとも具体的で、だれにでもできる「踊る原典」であると言える。したがつて、井上昭夫も論じているように、「てをどり」は、教祖が自ら踊られた姿を再現しようとする学びであると言える。教祖がご覧になっているという感覚を、身体知として体験することができるのである。(35)

「みかぐらうた」のお手を振ることによつて、私たちが変わらなければ、踊る意味はない。「理を振る」とは、みずからが「てをどり」を通して変化し、成人することにほかならない。言い換えれば、心の勇みと成人がもたらされない「てをどり」は、形は美しく踊つていたとしても、その「てをどり」は「理

を振る」という思召に叶っていないと言えよう。

「みかぐらうた」とは、お道の信仰の目的を実現するための動き、つまり、ひながたの実践の筋道であると解釈することができる。「おふでさき」では、「理の歌」でせめきると啓示されているのに対して、「みかぐらうた」では、「理を振る」という身体知に重きが置かれている。「てをどり」の動作をそのまま辿ることは、もつとも具体的に教祖の「ひながたの道」の道を辿ることにほかならないと言えるであろう。(36)

最後に、つとめの地歌としての「みかぐらうた」の特徴について、簡潔に論じておきたい。『稿本天理教教祖伝』に記されているように、(37) かぐらづとめは、元のぢばにおいて勤める。十人のつとめ人衆が、かんろだいを囲み、親神の人間世界創造の働きをそのままに、それぞれの守護の理を承けて、面をつけ、理を手振りに現わして勤められる。地歌鳴物の調子に従い、親という元という理一つに溶け込んで、一手一つに勤められるとき、親神の創造の守護は鮮やかに現われ、いかなる身上の悩みも事情の苦しみも取り除かれて、この世界は次第に陽気ぐらしの世界へと立替わると教えられる。

てをどりは、陽気ぐらしの如実の現われとして、かんろだいのぢば以外の所でも勤めることを許されている。それは、地上に充ちる陽気ぐらしの現われとも言えることができる。このてをどりの地歌として教えられたのが、よろづよ八首及び十二下りの歌である。かぐらとてをどりの地歌を合わせた、つとめの地歌は「みかぐらうた」と呼ばれる。かぐらづとめ

は元のぢばでのみ勤められるが、てをどりはそのかぐらづとめの理を受けて、国々所々の教会で勤められる。

親神は陽気ぐらしをさせたいとの思召により、よろづたすけの道として、たすけづとめを教えられた。この世の元初まりの時に、親神は、人間の陽気ぐらしを見て共に楽しみたいとの思召から、人間をお創り下されたと教えられる。陽気ぐらしこそ、親神の思召にかなう人間生活である。親神は陽気ぐらしへと導く道として、たすけづとめを教えられたのである。このおつとめでは、ただ手を振るだけではなく、おうたや手振りに込められた意味を十分に理解し、心に治めることが肝心である。そうすることによって、親神の思いに沿った、心遣いができるようになり、陽気ぐらしの世界へと近づいていくことができるのであろう。

## 結 論

これまで論じてきたように、本論文では、「みかぐらうた」のおうたの意味と手振りの意味が異なるように思える箇所を手がかりとして、おうたと手振りの関係性を考察してきた。特に第二章では、「みかぐらうた」にみる「こゝろ」に焦点を置き、第三章では、手振りと「理」の関係性を考察した。

おつとめは、教祖みずからが教えられた大切な教えである。おつとめは、ぢばで勤められるかぐらづとめの理を頂いて、その理を受けて各教会でもつとめられる。おつとめをしっか

りつとめることで、親神のご守護を見せていただけ。つとめの地歌である「みかぐらうた」の手振りには、何度も繰り返し出てくる基本的なものから、一度しか出てこない特殊なものまで、さまざまなものがある。その手振りは教祖がみずから教えられたものである。この手振りは、おうたの意味合いを表している。

手振りの中には、一つの語に対して、いくつもの手振りで表現されているものがある。それらの中でも、本論文では、「こゝろ」に焦点を絞って考察した。また、本論文では挙げなかったが、異なる語で同じ手振りのものも存在している。さらに、「出直す」ということは一見、死ぬことを連想してしまいが、お道の教えでは、もう一度戻ってやり直すという意味も込められている。「こゝろえちがひはでなほしや」と教えられているように、私たちは心得違いのないように通らせていただくことが肝心であると思われる。しかし、親神の思召に沿わない心遣いをしてしまったときには、心のほこりを払うようにさせていただく。心のほこりは、おつとめによって払わせていただくことができる。心得違いをってしまったら、もう一度やり直すためにも、おつとめを勤めて、心の掃除をするようにする。

教祖が「つとめに、手がぐにやぐにやするのは、心がぐにやぐにやしているからや。一つ手の振り方間違っても、宜敷ない。このつとめで命の切換するのや。大切なつとめやで。」と論されたと言われるように、おつとめを勤めるときには、た

だ手を振るのではなく、間違いないように心掛けることが肝心である。その手振りに込められた意味を十分に理解しようとする。おうただけでは分かりにくい点を手振りや足の動きによって、より分かりやすく教えられている。また、「みかぐらうた」はその人の心の成人に応じて、悟らせていただくことができる。言い換えれば、だれにでも分かりやすいように配慮されているのである。このように考えると、「みかぐらうた」はあらためて、口に唱え、身体で踊るところに、ほかの原典よりも身近に感じることができるよう思われる。

つまり、理を振るということは、「みかぐらうた」のおうたとその意味に合わせて、手を振らせていただくことを意味する。したがって、理を振るとは、おうたに表れる理を手振りによって表現することであるとも言えるであろう。「理」とは、陽気ぐらし世界実現へ向けての筋道という意味を表していると考えられる。親神の思召である陽気ぐらし世界への筋道を「理」という言葉をもつて、私たちに分かりやすく、また、実践しやすく表現されているのである。

陽気ぐらし世界の実現には、言うまでもなく、私たちの心の遣い方が肝心である。私たちのこの身体は、親神から貸していただいているかしものであって、自分のものではない。私たちは心だけが自分の思い通りに使うことができるのであって、その心を親神の思召に沿うように遣わせていただくことが肝心である。私たちはおつとめを勤めさせていただくことによって、親神のご守護を心の中で、ありありと感じと

らせていただくだけではなく、身体でも親神のご守護の有難さを体解させていただくこともできる。したがって、「みかぐらうた」に込められた親神の思いをしっかりと心に治めさせていただくことはもちろんのこと、おつとめにおける手振りも、間違いのないように振らせていただくことが肝心であると云えるであろう。

## 注

- (1) キヤサリン・ベル「パフォーマンス」(マーク・C・テイラー編〈奥山倫明監訳〉『宗教学必須用語22』刀水書房、二〇〇八年、四三四〜四五九頁。
- (2) 澤井義次『天理教人間学の地平』天理大学附属おやさと研究所、二〇〇七年、六六〜六七頁。
- (3) 深谷忠政『みかぐらうた講義 改訂新版』天理教道友社、一九八六年、一頁。
- (4) 天理教教会本部編『稿本天理教教祖伝』天理教道友社、二〇一六年、七二頁。
- (5) 天理教教会本部編『稿本天理教教祖伝逸話篇』天理教道友社、一九九九年、一五〜二六頁。
- (6) 澤井勇一『「みかぐらうた」の歌と手振り』『天理教校論叢』第五号、天理教校本科研究室、一九六四年、一二八頁。
- (7) 同上論文、一三六〜一三七頁。
- (8) 山澤為次『おてふり概要』天理教道友社、一九六五年、六四〜六五頁。
- (9) 同上書、一八四頁。
- (10) 新村出編『広辞苑』第五版、岩波書店、一九九八年、一八三五頁。
- (11) 天理教教会本部編『天理教教典』天理教道友社、二〇〇九年、七〇頁。
- (12) 深谷忠政『みかぐらうた講義 改訂新版』天理教道友社、一九八六年、一四七頁。
- (13) 平野知一『みかぐらうた叙説』天理教道友社、一九〇二年、一四七頁。
- (14) 榊井孝四郎『みかぐらうた語り艸』天理教道友社、二〇〇二年、一七八頁。
- (15) 上田嘉成『おかぐらうた』天理教道友社、一九九四年、四五四〜四五五頁。
- (16) 上田嘉成『みかぐらうた略註』天理教道友社、二〇一〇年、三〇頁。
- (17) 天理教道友社編『みかぐらうたの世界をたずねて』二〇一一年、二二〇頁。
- (18) 山本正義『みかぐらうたを讀む』天理教道友社、一九九三年、一六四頁。
- (19) 辻井正和『こころへちがいはでなおしや(六下り目)』(天理大学おやさと研究所編『「みかぐらうた」の世界を味わう』、天理大学出版部、二〇一一年、一三〇〜一三三頁。
- (20) 安藤正吉『みかぐらうた講話』天理教道友社、一九七

- 九年、一二四頁。
- (21) 深谷善和『お道のことば』天理教道友社、一九七七年、二三頁。
- (22) 深谷忠政『みかぐらうた講義 改訂新版』天理教道友社、一九八六年、六四頁。
- (23) 上田嘉成『おふでさき講義』天理教道友社、二〇〇四年、九一〇頁。
- (24) 澤井義次「りをふく(二下り目)」(天理大学おやさと研究所編『みかぐらうた』の世界を味わう)、天理大学出版部、二〇一一年、七六頁。
- (25) 天理教会本部編『稿本天理教教祖伝』天理教道友社、二〇一六年、九五頁。『稿本天理教教祖伝逸話篇』天理教道友社、二〇〇九年、一五頁。
- (26) 澤井勇一『「みかぐらうた」の歌と手振り』『天理教校論叢』第5号、天理教校本科研究室、一九六四年、一二六―一二七頁。
- (27) 諸井慶一郎『てをどりの道』正道社、二〇一六年、六五頁。
- (28) 同上書、六五頁。
- (29) 同上書、一〇七頁。
- (30) 同上書、二二九頁。
- (31) 深谷忠政『みかぐらうた講義 改訂新版』天理教道友社、一九八六年、九九頁。
- (32) 同上書、二〇九頁。

- (33) 同上書、一三三頁。
- (34) 同上書、一六一頁。
- (35) 井上昭夫『みかぐらうた』日本地域社会研究所、二〇一二年、一二二頁。
- (36) 同上書、一三三頁。
- (37) 天理教会本部編『稿本天理教教祖伝』天理教道友社、二〇一六年、六九―七三頁。

### 参考文献一覧

- ・「おふでさき」
- ・「みかぐらうた」
- ・「おさしづ」
- ・天理教会本部編『稿本天理教教祖伝』天理教道友社、二〇一六年(一九五六年)。
- ・天理教会本部編『稿本天理教教祖伝逸話篇』天理教道友社、二〇〇九年(一九七六年)。
- ・天理教会本部編『天理教教典』天理教道友社、二〇〇九年(一九四九年)。
- ・諸井慶一郎『てをどりの道』正道社、二〇一六年。
- ・諸井慶一郎『てをどりの道―教会のおつとめ』『あらしとうりよう』第一八二号、天理教青年会本部出版部、一九九六年。
- ・深谷忠政『みかぐらうた講義 改訂新版』天理教道友社、

- 一九八六年。
- ・山澤為次『おてふり概要』天理教道友社、二〇〇三年。
  - ・山本正義『みかぐらうたを讀む』天理教道友社、一九九三年。
  - ・天理教道友社『みかぐらうたの世界をたずねて』天理教道友社、二〇〇一年。
  - ・安藤正吉『みかぐらうた講話』天理教道友社、一九七九年。
  - ・上田嘉成『おかぐらうた』天理教道友社、一九九四年。
  - ・上田嘉成『おふでさき講義』天理教道友社、二〇〇四年。
  - ・上田嘉成『みかぐらうた略註』二〇一〇年。
  - ・澤井勇一『おふでさきを讀む』天理教道友社、一九九八年。
  - ・澤井勇一『おてふり私論』『あらしとよりよう』第六〇号、天理教青年会本部出版部、一九六五年。
  - ・澤井勇一『みかぐらうた』の歌と手振り』『天理教校論叢』第五号、天理教校本科研究室、一九六四年。
  - ・平野知一『みかぐらうた叙説』天理教道友社、一九九〇年。
  - ・榊井孝四郎『みかぐらうた語り艸』天理教道友社、二〇〇二年。
  - ・深谷善和『お道のことば』天理教道友社、一九七七年。
  - ・井上昭夫『みかぐらうた』日本地域社会研究所、二〇一二年。
  - ・永尾廣海『おつとめの理について』『みちのだい』第八九号、天理教婦人会、一九八四年。
  - ・佐藤浩司「かぐらとてをどり一〜四」『あらしとよりよう』第一三六、一三七、一三九、一四〇号、天理教青年会本部出版部、一九八四年、一九八五年。
  - ・塩谷寛「理を振るおてふり自問自答二題一〜三」『みちのと』四月号〜七月号、天理教道友社、一九八五年。
  - ・辻井正和「こころへちがいはでなおしや（六下り目）」（天理大学おやさと研究所編『みかぐらうた』の世界を味わう）、天理大学出版部、二〇一一年。
  - ・キャサリン・ベル「パフォーマンス」（マーク・C・テイラー編〈奥山倫明監訳〉『宗教学必須用語』刀水書房、二〇〇八年、四三四〜四五九頁）。
  - ・澤井義次『天理教人間学の地平』天理大学附属おやさと研究所、二〇〇七年。
  - ・天理大学附属おやさと研究所『改訂天理教事典』天理教道友社、一九九七年。
  - ・新村出編『広辞苑 第五版』岩波書店、一九九八年。

成人 第六五号

発行日 平成三〇年三月二二日

編集 天理大学宗教学科研究室

天理大学成人会

発行者 天理大学成人会

印刷・製本 天理大学DPセンター